
COBALT-SERIES
聖石の使徒
前田珠子
其(そ)は水に遊ぶ者
集英社

COBALT-SERIES

聖石の使徒

其(そ)は水に遊ぶ者

前田珠子



集英社



COBALT-SERIES

聖石の使徒

其(そ)は水に遊ぶ者

前田珠子

集英社

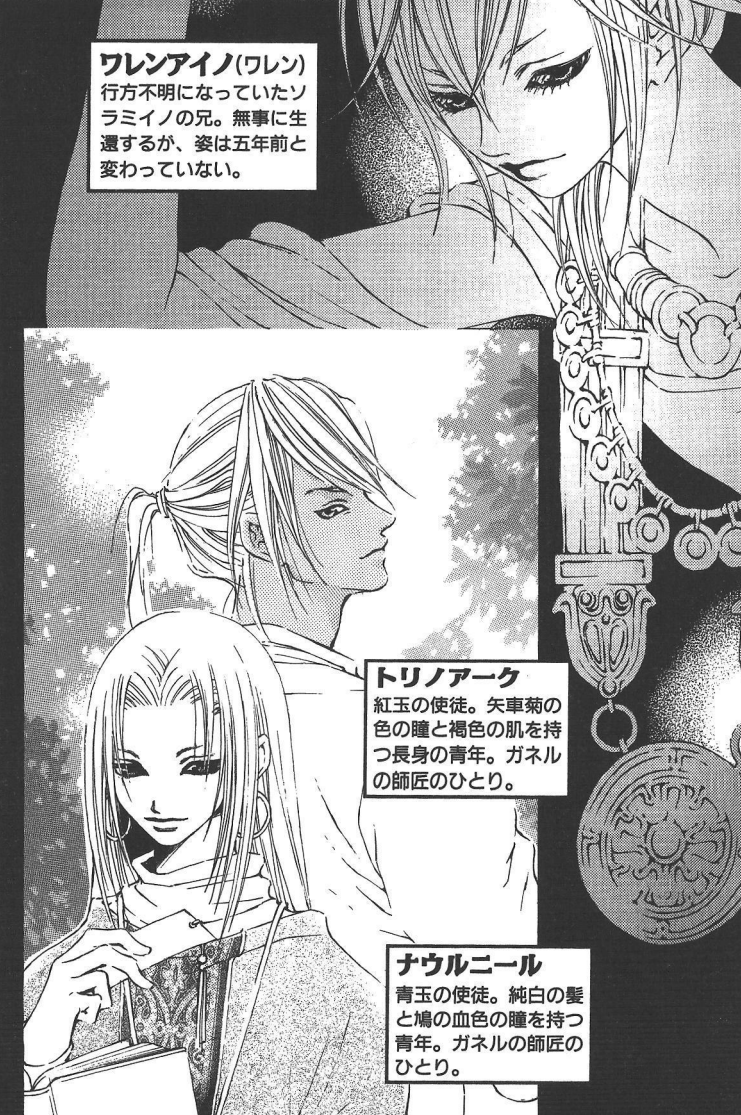
目　次

聖石の使徒
其(そ)は水に遊ぶ者

バルヴァローズ創世神話……7
其(そ)は水に遊ぶ者……15
玻璃(はり)の籠(かご)……85
あとがき……187

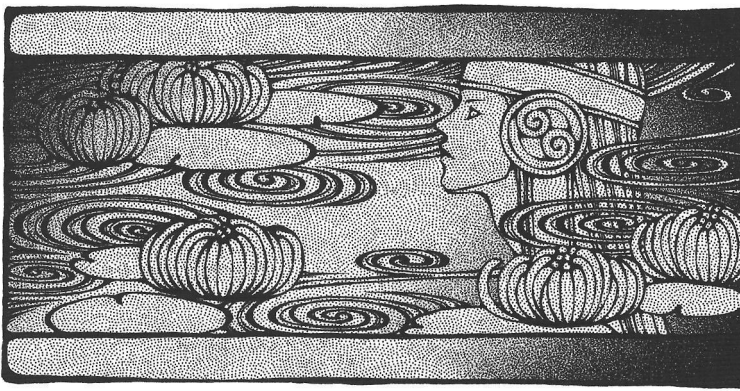


聖石の使徒■登場人物紹介


ワレンアイノ(ワレン)
行方不明になっていたソラミイノの兄。無事に生還するが、姿は五年前と変わっていない。
トリノアーク
紅玉の使徒。矢車菊の色の瞳と褐色の肌を持つ長身の青年。ガネルの師匠のひとり。
ナウルニール
青玉の使徒。純白の髪と鳩の血色の瞳を持つ青年。ガネルの師匠のひとり。

イラスト／山本鳥尾

バルヴァローズ創世神話



万能にして麗しき至高神――その名もセイトーリ。
恵み豊かにして美しいこの世界――バルヴァローズの創世母神。
この世界を美しく、且つ豊かに保つため、かの女神は多くの神々を産み落とした。
最初に生まれたのはライアトーリ――太陽を司る女神であった。
セイトーリの両手のなかに、金の輝きが生じた瞬間、彼女は生まれた。
次いで生まれたのは三つ子の月神――彼女の左の瞳から、不意にこぼれ落ちた涙とともに、彼らはこの世に生を受けた。
その名はシイムタール、サイサロール、サラムトーリ――。
シイムタールとサイサロールは、この世界で初めての男神だった。
セイトーリの右の瞳からこぼれた涙は海となり、同時に海神アイルトーリが生まれた。
その吐息は風となり、空間が生まれた。このとき誕生したのが空神パルムローリだった。
また、女神は指先から、一雫の血を流した。
これが大地を生み出した。

地神アスカニーリがこうして生まれた。
女神はバルヴァローズに息づく者たちのために、安らぎと静寂を与えたいと願い、歌を口ずさんだ。
その歌声は、世界の半分を包みこむ夜を生み出し、夜神タイナトーリが誕生した。
女神は世界を大変に愛していたため、そうして産み落とした子供神たちにこう持ちかけた。
『妾とともに、この世界を豊かにするべく、力を貸してはくれまいか』
と――。
無論、子供神たちに異論のあるはずもなかった。
彼らもまた、バルヴァローズに魅了されていたのは勿論、そもそもがこの世界との深い絆を、生まれながらに持っていたのだから。
まず海神アイルトーリが真水の神カンラタールを生み出した。カンラタールもまた数多くの子供たちを生んだことにより、水は海以外にも居場所を得たわけである。
次に空神パルムローリが、風の神イーオダールを生み出した。かくして世界には気象、気候というものが生まれた。
太陽神ライアトーリは、自らの温もりと明るさを伝えるべく、火神イイタールを生んだ。イイタールもまた多くの子供たちを生んだのだが、時に制御のきかぬ気性の激しさを発揮し、し

ばらくの間、太陽神の監視下に置かれた。制御を学び、彼らが自由を許されたのは、バルヴァローズにひとが生まれてからのことだった。

さて、海神アイルトーリは兄神たる月神と親密な仲であった。

一度は交わり、子供を生み出そうと思うほどには。

しかし、生まれた子供が不完全な命に過ぎぬことを知ったふたりは、ともに次代を紡ぐことをあきらめた。

とはいえ、互いに嫌いあってのことではない。

そのせいか、アイルトーリの子供であるカンラタールは、月神たちに非常によく懐いていた。

そのままバルヴァローズが安定の道をたどったならば、それはなんの障害にもならなかったに違いない。

しかし、大切なバルヴァローズのために、その役に立ちたいと、三人の月神は、夜神タイナトーリに申し入れた——選ばれるのはただひとりだとわからぬはずもあるまいに。

そうしてタイナトーリはサラムトーリを選び、こうしてバルヴァローズの夜空には星々が見られるようになった。

このころ、バルヴァローズは間違いなく、例えがたい美しさに満ちた世界だった。

しかし、その創世に関与したいと欲しながら、そうできなかった者たちの胸には、鬱屈がたまりつつあったのだ。

そう……三つ子の月神中、夜神に選ばれなかったふたりの男神には。

最初は小さな感情の揺れに過ぎなかったのかもしれない。

だが時を経るに連れ、思いは募り、やがては負の感情へと変化したのではあるまいか。

ふたりの月神は、世界に有害な気配を放つようになった。

妬みと憎しみが、彼らふたりを浸食したとき、彼らを止め得る者は、姉妹神たちのなかにはひとりとしていなかった。

彼らの負の感情は、そこまで大きく育ってしまっていたのである。

止められるだけの力を持つ者は、すでにセイトーリしかいなかった。

『なんと悲しく情けないこと……』

呻きを洩らし、セイトーリは決断した――すなわち、自らが産み落とした我が子の抹殺を。

かくして至高の女神は、慟哭に身を震わせながらふたりの我が子を滅ぼした。

だが、それですべてが終わったわけではなかった。天地を問わず、喪われた月神たちの放った瘴気ははびこっており、それは彼らの死後も消えることはなかったからである。

セイトーリはこれらをひとつに集め、自らの胸に抱き、浄化することを選んだ。だがその瘴

気は強烈なもので、至高神の彼女にしてみても、たやすいことではなかった。

彼女はこうして、永い眠りに就くこととなった。

以降、彼女は『瘴の女神』と呼ばれるようになる。

彼女が眠りに就く寸前に、生み出された最後の双子神――生を司る誕生神カリカトーリと、死と再生を司る死神ナムラタールは、その眠りの意味を誰よりよく知る者たちだった。

それゆえ、彼らは人々に告げたのである。

瘴の女神の眠りを妨げてはならぬ――と。

瘴気は女神を刺激する――殊に、強いそれは。

地上に生じた強い瘴気に、万が一にも瘴の女神の眠りが妨げられたとしたら……そして彼女が目覚めてしまったとしたら。

浄化しきれておらぬ喪月神の瘴気は、世界中に飛散する。

それはバルヴァローズの破滅を意味する。

だが、一度喪月神の瘴気に触れてしまった人間は、自らの心で、あるいは体で、それを生み出すことを覚えてしまっていた。

嫉妬、野心、執着、憎悪――一度蒔かれてしまったそうした種子は、もはや滅することができぬほど、人々の心に根付いてしまっていた。

同時に、皮肉にも、その悪しき土壌を持つがゆえに、そうした感情や誘惑に打ち勝つ、強い精神を持つに至る人間も現れた。

神々は、そうした魂を持つ者たちを選び出し、特別の加護を与える代わり、彼らの生み出した瘴気を片づけさせる体系を作り上げた。

こうして生まれたのが聖石の使徒である。

瘴の女神の眠りを守るため、彼らは誕生したのだ……。

だが――。

長い、長い時を経る内に、神々ですら予想だにしなかった事態が持ち上がった。

砂鉄が磁石に吸いよせられるかのように、人間の生み出した瘴気は、喪月神のそれに惹かれ、やがて、両者の間にはごくか細いものながら、糸にも似たつながりが出来てしまったのだ。

細いそれをたどりながら、喪月神の瘴気は確実に地上に洩れ出つづけた。

残された神々が、そのことに気づいたのは、ずいぶんと時間が経ってからのことだった。

とはいえ、道がないわけではない。

手遅れというわけでは決してないと、神々はそう信じた。

前例のない『聖石』を抱いた子供が生まれるようになったのは、そのころからのこと――。

同時に、直接神々の祝福を受ける子供も――稀有であることに違いはないが――増え始めたのである……。

其（そ）は水に遊ぶ者



プロローグ

その日、幼いファーリィンの狭い世界は、粉々に打ち砕かれた。
美しく、賑やかだった街は炎に包まれ、生まれ育った屋敷には、もう二度と戻れないと……否、戻るなと言われた。
突然、見知らぬ兵隊たちが襲ってきたのだ。
少なくとも、事情を知らないファーリィンには、そうとしか思えなかった。
「坊ちゃま……いえ、ファーさま、お早く」
彼の手を引き、城門に向かうのは、生まれたときから知っている侍女頭のマイヤーナ。
いつも身につけている服とは大違いの、粗末なごわごわしたものを着ている。
そして、それはファーリィンにしても同じだった。
荒い織りの粗末な生地で仕立てられた服は、到底着心地のいいものではなかったが、皮膚が炎症を起こすほどではなかった。領主に仕える武門の跡取りである彼は、日々鍛練を積み重ね

ており、おかげで肌も丈夫にできていたのだ。
とはいえ、このとき彼はまだ八歳――現実になにが起こったのか、正確に把握することはできずにいた。これは彼が世間知らずの子供だったから、とは言い切れない。
襲撃はあまりにも突然であり、彼の父親ですら、ほとんどなす術がなかったのだから。
唯一できたことは、ファーリィンともうひとりの子供――彼のたったひとりの弟、ヴァディリンだ――に街のそれのような格好をさせて、侍女頭に委ねて逃がすことだけだった。
（なぜ……こんなことに……？）
わけがわからない。
マイヤーナに尋ねようにも、「いまは駄目です」と繰り返すばかり。
手を引かれ、歩いていくうちに、ファーリィンはマイヤーナがどこへ向かっているのかを知った。
街の外れにある神殿群跡だ。
街が大きくなるにつれ、手狭になったという理由で、街の中心に移築された神殿は、しかし取り壊されることなく、再度の土地計画に組み入れられることもなく、そこに静かに存在しつづけていた。
それがなぜなのか、それまでファーリィンは考えたこともなかったが、この期に及んでは悟

らざるを得なかった。

（……隠し通路……）

恐らくは、街の外に抜け出すための。

なんのために――父を含む先祖たちが――後生大事に、こんな抜け道を残しておいたのかはわからない。

否、わかりたくなかった。

だが――。

国主からかけられた謀叛の嫌疑を証明づけるような事実は、ひとつとして認めたくはないと思う一方で、この抜け道を心から歓迎する思いがあることも事実だった。

マイヤーナの腕のなかには、ヴァディリンがいる。

いまの彼にとっては唯一の肉親で……家族だった。

（この子まで失うぐらいなら……どんな恥知らずな真似だってできる……）

秘密の通路の扉を開くため、マイヤーナから――彼女は両手を使う自由を得るために、ヴァディリンを手放す必要があったのだ――弟の体を受け取り、抱きしめながら、八歳の少年は自身のなかの優先順位を整理した。

まず第一は生き延びること――。

雪辱も真相解明も、そのあとのことだ。
背後に、大きな炎の気配を感じた。
燃えているのは街か、それとも、彼が生まれ育った懐かしい屋敷か……。
我慢の限りを尽くして、彼は振り返ることをしなかった。
拠り所となる故郷の喪失を、あえて目にすることはない——いや、見たくはないという理由からだった。
そうしてファーリィンは弟をぎゅっと抱きしめた。
もはや、縋るべき相手は他にはないかのように——。
事実、ファーリィンにとって、それは事実で……真実だったのである。

1

豊珠大陸の東南に、彼黄という国がある。

砂漠に隣したこの小国は、少ない雨のため、穀物の大部分を他国からの輸入に頼っている。世界最北の大陸のこと、もっと北方に位置する国なども、事情は似たり寄ったりだが、他国と違い、この国には目ぼしい鉱脈がない。

産する宝石や貴金属が少ないとあっては、充分な量の穀物を買い入れることはできず、必然的に彼黄の民は、貧しさに喘いでいた。

だが、例外とされる土地があった。

最も砂漠に近い位置にありながら、水と緑に恵まれた街――翠濫である。

人々は、翠濫をこう呼ぶ。

水神の加護を受けた街、と――。

翠濫の街外れ――雑木の茂みをかき分けるようにして、ヴィクティーンは歩いていた。
季節は夏。街中に行き渡った潤沢な水のおかげで、木々は枝を伸ばし放題となっており、歩きにくいことこの上ない。
まったく、と彼女は独りごちる。
「極力自然のままに……と言ったって、これじゃあほとんど獣道じゃない。ファーには悪いけど、少しは切らせてもらわないと……」
もっとも、やりすぎるのは厳禁だ。
この茂みの向こう――翠泉のほとりに住む青年は、きちんとした道が通ることなど望んではいないのだから。
それもこれも、三年前の騒ぎのせいだ。
当時のことを思い出すと、ヴィクティーンはいまでも胸が痛くなる。
（わたしから見たら、どっちもどっちなんだけど……ね）
いや、それはファーにしても同じことなのだろう。
だから、彼はまだこの街に留まっていてくれている。翠濫のために、惜しむことなく、力を

使ってくれさえしている。

それでも、もう、以前のように、街のみなと必要以上に交わろうとはしない——ごくごく例外の、幾人かを除いて。

ヴィクティーンはそのなかのひとりだった。

だから、彼のもとへ通うことができるのだ。そうでない者が立ち入ろうものなら、この雑木林は迷路と化すに違いない。いや、実際にそうなるのだ。

翠泉に湧いた水で育った木々は、彼の意志に従うのだから。

まあ、でも——と、彼女は思う。

(歩きにくくて、服がよく破れたりするけど……でも、森林浴できるだなんて、物凄い役得よね)

恐らく彼黄において——いや、もしかしたら豊珠中を探したところで、これほどまでに濃密な緑の気配を宿している場所はないかもしれない。

それを満喫することを許された、数少ない人物のひとりが自分である——というのは、なんとはなし、自尊心をくすぐられる特別待遇だ。

もちろん、その特権が自分だけのものでないことはわかっているし、ファーのなかで、一番でないこともわかっているのだけれど。

（ファーの一番はなにがあろうと……）

ヴィクティーンの脳裏に、ひとりの少年の顔が浮かんだ。

三年前に姿を消した、幼なじみの少年の――それ。

ファーと同じ色の髪と瞳を持ちながら、性格の違いがはっきり出た表情のせいで、まるで似ていない……ファーの弟。

ヴィクティーンの幼なじみ。

（ヴァディ……）

直情径行を絵に描いたような少年――。

（いったい、どこをほっつき歩いてんだか……）

「無事なら無事と、便りのひとつも寄越しなさいよね。まったく、わたしもファーも、どれだけ心配してるか、わかってるのかしら、一体!?」

苛立つ心のままにぼやいた彼女は、しかしすぐに表情を改めた――あきらめたように。

（わかってないわね……）

たぶん、恐らく、きっと――絶対。

「タチが、悪いわ」

袋小路にぶつかりそうになった思考を、無理やり断ち切るために彼女がそうつぶやいたとき

のことである。

頭上から——常識的に考えた場合、あり得ないはずなのだが——バリ、ベキ、ガスン……という音が聞こえてきた。

いったい、なにごと——と、身構える間もなかった。

空から——ひとが降ってきた。

しかも、ひとりではない。三人も、だ。

「やだ、なにこれ、どういうこと!?」

一番衝撃と負担の軽かったらしい少女が、きょろきょろと周囲を見回しながら、途方に暮れたような声を上げた。

年のころは十五、六といったところだろうか。

紫紺の髪と、黄橙色の瞳という組み合わせがなんとも珍しい。

「慌てることはないわよ、アーク。どうせこの迷惑男が、力の制御に失敗しただけなんでしょうからね」

腰をさすりながら——落ちたときに打ったのだろうが、どうやら軽傷らしい——よろよろと立ち上がった、少し大人びた少女が、苦々しげにそう答えた。

こちらは、銀髪と緑の瞳の美少女だった。

あと数年もすれば、求愛を断るのに苦労させられそうな、文句なしの美貌の主である。
（もっとも、気というか、性格はきつそうだから、有象無象は木っ端みじんにされちゃうかしらね）
埒もないと、自分でもわかっていることを考えてしまうのは、やはり彼女らの常識はずれの登場に、頭がついていっていなかったからかもしれない。
「なんでもいいから、いいかげん、退け！　いつまで、ひとの背中を座布団がわりにするつもりなんだ!?」
叫んだ青年は、見事な黒髪の主だった。
彼の背中を文字通り『座布団』にしていた少女が、言われて慌てて立ち上がろうとするのを押しとどめたのは、銀髪の髪の少女だった。
「慌てないで、アーク。まず、両手をのばして……それから、曲げてみて。どう、痛くない？」
「うん」
痛くない、と紫紺の髪の少女がうなずく。
「じゃあ、今度は足も同じようにして……どう？」
「うん、大丈夫みたい。痛くない」

「そう。じゃあ、いいわ、動いても。でも、どこか挫いてるかもしれないんだから、まずはゆっくり動かすのよ、いい？」

「なに、呑気なこと抜かしてるんだ!?　重いったら重いんだよ！　早く退け。さっさと退け。一刻も早く退け！」

黒髪の青年の苛立たしげな態度に、しかし銀髪の少女は動じた風もなかった。

「うるさいわね、疫病神！　自信たっぷりに王都のアスカニーリ神殿まで飛んで行けると約束したくせにっっ！　こんなところで立ち往生するだなんて、聞いちゃいないわよっっ!?　どういうことなのよ、いったい!?」

「おれに尋くなよ。いったいぜんたい、なんでこんなことになったのか、おれだってわかっちゃいないんだからな」

「この、役立たず！」

「なんだと!?」

両者の関係はわからなかったものの、この会話が非常な危険性を秘めたものであることだけは、ひしひしと感じられ、ヴィクティーンは息をのんだ。

彼女は、途方に暮れていた。

それも無理からぬことだった。



突然、空から三人もの人間が降ってきて、しかもすぐに口げんかを始めたのだ。
事態を読みとれという方が無茶である。
（この子たちってば、いったい……!?）
何者なのか――。
疑問が口に上る寸前のこと――。
衝撃的な台詞が、黒髪の青年の口から飛び出した。
「仕方ないだろうがっ！　風霊たちはなにも異常は感じてなかった！　感じてたら、必ず異変をこっちに知らせてきたに違いないんだから！」
この言葉に、ヴィクティーンはぴくりと反応した。
風霊――別名イーオダールの子供たち。
そして、そんな者たちの加護と助力を借り受けられる存在といえば。
たったひとつの可能性しか、ヴィクティーンは思いつくことができなかった。
「イーオダールの息子さま、なんですねっっ!?」
黒髪の青年に、きらきらと輝く目を向けながら、彼女は叫んでいた。
「イーオダールの……」
「息子さま……」

残るふたりの少女たちが、なんとも言えぬ顔になって、そうつぶやいたものの、すっかり興奮してしまったヴィクティーンの目には入らない。

すっかり――自分に都合のいい――誤解をしてしまったヴィクティーンに案内されるまま、歩きつづける三人は、度々視線を交わしつづけた。

ヴィクティーンが誤解でもって受け入れてしまった三人は、実のところ厄介な事情持ちだったりした。

そんな場合、互いに他意があろうとなかろうと、騒ぎは起こるものである。

呆然としつつも、すぐさま考え込んだ三人中ふたり――銀髪の少女と黒髪の青年だ――の計画をパアにしてくれたのは、紫紺の髪の少女だった。

「なんのこと？　そんなひと、いたの？」

彼女がそう口にしたとたん、ばかすかぼこすかと、左右からこぶしと平手が襲いかかってきた。

黙れ。不用意なことを口にするな。

両者の眼差しの強さに、少女はそれ以上の発言を控えた。

運命は賽の目次第となったのだ……。

2

協議の上――主に話し合ったのは紫紺の髪の少女を除くふたりだったのだが――黒髪の青年ガネルオージェが『イーオダールの息子』である誤解は解くことになった。

嘘やはったりは状況によっては有益だが、見抜かれる可能性が高い場合は逆に働きかねないことを、両者が知っていたためである。

では、なにもかも正直に打ち明ける気になったかと言えば、それも少し違った。

敵視されかねない要因を抱えこんでいる場合、やはりそういったことは隠しておくべきだろうと意見が一致したためだ。

因みに、今回の懸念材料は、紫紺の髪のアラクセイトのことだ。

火神イイタールの娘である彼女のことを、正直に打ち明けるべきか否かを迷った結果、彼らは黙っておくという選択肢を取ったわけである。

代わりに、ほかのことはなるべく正直に打ち明けることにした――明かしてもかまわないと

思われる範疇のことに関しては。

だから、アラクセイトたち三人は、『三人の聖石の子供』として、翠濫の領主の屋敷に招かれることとなったのだ。

本音を言うなら、さっさと王都を目指して出立したかったのだけれど、あからさまな『奇跡』を見せつけてしまった以上、不必要にそそくさと退場するのは危険だった。

あらぬ疑念を呼ぶ真似は控える必要があったのだ。

いくらなんでも『空を飛ぶ』のは、これから必要最低限にしなければ――。

とは、最も理性的かつ常識的判断力を持つ銀髪の少女の思いだった。

もっとも、あくまで事態に余裕があれば、の話に限ったけれど。

いざとなれば、手段は選ばない。

これが、この三人の基本姿勢だったりするのである。

「完璧、足止めにかかってるわね」

うんざりした顔でつぶやいたのはソラミイノだった。

「おまけに体よく見張りつけられてるしな」

同意を示すのはガネルオージェ――不用意な発言が多いことで、極力口を開くなと言われているアラクセイトは沈黙を守っている。

「使徒だなんて名乗ってないから、神殿に身元確認されることはないと思うんだけど……」

聖石の使徒のほとんどを統括するアスカニーリ神殿の名門出身のソラミイノは、現在家出中につき、問い合わされたりするのは、大変に不都合だったりする。

「いや、それより警戒すべきなのは、囲い込みだと思うぞ？　使徒なら手出しできなくとも、ただの『子供』なら俗界でも利用できるからな」

使徒に選ばれなかった『聖石の子供』は、神殿の保護を受けることもできるが、そうでない道を選ぶことも許されている。

自らの生み出す子供石を用いての医療活動などがその一例だ。

聖石の種類にもよるが、『聖石の子供』に利用価値を見いだす者は多い。

「欲張りねえ」

呆れを隠そうともせずに、ソラミイノがぼやいた。

「彼黄中で最も恵まれてるくせに、これ以上なにが欲しいというのかしら？　際限のない欲望は、堕落と滅びを呼びこむだけだと、歴史が証明してるでしょうに……」

「自分ならうまくやれるとでも思ってるんだろうよ。もしくは、現在享受している恵みに対して、将来的な不安を抱いているか……」

そうつぶやき、ガネルオージェは黙りこんだ。

この豊かな街の上層部が、いったいどんな懸念を抱いているのか――どうにもわからないとでも言いたげな顔だった。

ぽつりと、爆弾を――本当に他意もなにもなく――落としたのはアラクセイトだった。

「結局、ヴィクティーンさんが紹介しようとしてたひとにもまだ会えないもんねえ……」

ソラミイノとガネルオージェが、はっとして彼女を振り返ったとき、彼女は『箝口令』を思い出したらしく、慌てて自分の口を押さえた。

「ご、ごめ……」

謝る彼女の様子に、つい目元を緩めながら、ソラミイノはこう告げた。

「謝らないでいいわ。忘れてたけど……あんたは失言の砂漠みたいな子だけど、ごくごく稀にいいことも言うのよね」

決して褒め言葉とは呼べないそれに、ガネルオージェも大まじめにうなずいた。

「そうだな。うさん臭いことが多過ぎて、そのあたりのことを綺麗に忘れてた。政治向きじゃない頭も、たまには必要だってことだな」

……全然、褒めてなかった。

アラクセイトの黄橙色の双眸に、悲しげな光が浮かんだとしても、それは無理からぬことであったろう。

もっとも、反論するほどに、彼女は無謀ではなかったが。

ともあれ、アラクセイトの一言で、まず攻めるべき点を認識したふたりが計画したのは、市街見物だった。

ただし、実際に出かけるのは少女ふたりだ。

ガネルオージェは風邪でも引きこんだことにして、用意された客室で、休養してもらうことにする。この際重要なことは、彼の容態があまりひどくはないことだ。医者など差し向けられない程度にすます必要があった。

そして、一番大切なことは——。

「どうやって、ヴィクティーンに手引きしてもらうか、よね……」

なにしろ、彼女は意図的に遠ざけられている節がある。

他人を介して連絡を取ろうにも、誰なら信頼できるのか、客人扱いの自分たちではわからない。

「ああ、それなら」

と、ガネルオージェが答えた。

「イーオダールの子供たちの力を借りればいいだろう。誤解を招きかねない方法には違いないが、確実にこちらの意図を伝える意味で、彼ら以上の助け手はないからな」

風霊たちは、こちらの声そのものを、特定のひとりのみに届けることができる。

ただし、ただというわけではない――ヴィクティーンの誤解通り、彼らのうちの誰かが、イーオダールの息子、もしくは娘でない限りは。

彼らは、自らの属性と同じ力が大好きで、それの宿る聖石の子供石を殊に好むのだ。

木の属性を示す色は青、もしくは紫。

それを代価に頼めば、とりたてて難しいことではない。

わけなのだが。

ここで、さらにひとつ、問題が持ち上がった。

その色の石は……迅速な移動を可能とするために、一行はこれまでに、かなり使ってしまっていたのである。

師匠たちから餞別代わりにもらった聖石の子供石は、まだたっぷりあったことはあったが、他の色彩をたたえる石に比べ、青や紫といったものは、極端に数が少なくなっていた。理由はもちろん、これまでさんざん、『空を飛んで移動』したからである。

数えてみれば、もう五粒も残ってはいないありさま。

ソラミイノは固く目を閉じた後、「急がば回れ、という言葉の意味がわかったような気がするわ」とつぶやいた。

本来なら、この時点で、計画は練り直しということになったはずなのだが、再び箝口令を破ったアラクセイトのおかげで事態は一変した。

「えーっっ、と。これとかは、使えないの？」

そう言って、差し出してきたのは、一部は真っ黒な……彼女が抱いて生まれてきた石墨でありながら、端の一部だけ、明るい青味のある透明な石に変質した塊だった。

その強さ、その美しさ、その至上の価値、それが意味する奇跡――。

同行者であるふたりを含め、バルヴァローズ中で、いまだ十指に満たぬ者しか把握できずにいる神の奇跡――あるいは破滅のための爆弾。

「アークっっっ！　あんたって子はぁぁぁっっ！」

ソラミイノが爆発した。

「いったいいつの間に、こんな、こんな、厄介で恐ろしいものを……」

アラクセイトは石墨の子供である。

これに間違いはない。



ただし——という注釈がつくのが、彼女の特異性の片鱗を示す。

石墨という、燃料か筆記用具の材料にしかならない石を抱いて生まれてきた彼女には、実は——非常事態において、という限定付きだが——非現実的な特技がある。

仲間なり自身の命が危険にさらされた場合、なんとか切り抜けるために、未知の力を発揮した挙句、本来抱いて生まれた石墨ではなく、金剛石を生み出すという離れ業だ。

ただし——幸いというべきか——彼女がそうした効果を見せた事象は、すべてソラミイノが把握していた。

ところが、このとき差し出された一部だけ青金剛石に変質した、大部分が石墨だという塊は、ソラミイノの記憶にはないものだったのだ。

強烈なソラミイノの怒りから逃れたいと思ったのか、アラクセイトはすぐに降参した。

「違うの！　単に、最近は修行してても爆発とか起こらなくなったし、嬉しいなって単純に思ってて……ただ、時々、すごく調子がいいなって感じるときがあって。そういうときには夢中になっちゃったりして……そしたら、なんでだか、そういうときに限って、瞑想から醒めると……なんでだか、こんな風になっちゃったりしてるの！」

それは——まあ、望ましい変化のひとつには違いない。

爆弾、あるいは火薬庫と呼び称された彼女の内面で、自らの力を制御するための意志と力が

生じはじめたのだとすれば、それに勝るめでたいことはない。
だが、それも時と場合によりけりである。
（うわあ……）
頭を抱え込む気分で、ソラミイノはこれからのことに思いを馳せた。
なんだって、よりにもよって、いまこの時に――。
という思いが、ある。
なぜ、もっと早く――それがかなわないのなら、なぜ、もっと遅くまで、その兆候を引き延ばせなかったのか。
ソラミイノは考えてみる。
金剛石を抱いて生まれてきた子供は、現在世界中でひとりしか確認されていないという。そのひとりというのが、同行者であるガネルオージェだというだけで、すでに充分厄介だというのに、特異な、ある意味もうひとりの金剛石の子供とも言えるアラクセイトまで、自由意思で金剛石を……しかもガネルオージェと違い、色とりどりのそれらを生み出せることが、もし余人に知られてしまったとしたら……。
ガネルオージェより、タチが悪い。
のほほん、ぽややん、つけこみ放題のこの娘に、いったいどれほどの人間が群がることか

――考えたくもない。

（こーれーはー、絶対秘密にしておかないと……）

ろくでもない大騒ぎが起こるに違いないのだ。

そんなのは御免だった。

アラクセイトがせっかくやる気になっているのに水を差すのは残念だが、ここはちょっと控えてもらおうと、ソラミイノは冷静に判断した。

（だって……この街は、なんだかおかしいわ。翠濫は確かに彼黄では特殊なぐらい恵まれた街ではあるけれど、ここまで飛び抜けて豊かだなんて話は聞いたことがない……）

そして、領主の自分たちに対する、度を越した歓待ぶり――。

用心するに越したことはない。

「いい、アーク？　お願いだから、この街にいる間だけでいいから、修行はあくまで基本的なものに限定してやってちょうだい」

当然のことながら、アラクセイトは訝しげな顔になった。

口を開けば――これはソラミイノにしてもガネルオージェにしても同じなのだが――もっときりきり修行しろ、さっさと自己制御できるようになれとしか言わない相手が、突然逆のことを言い出したのだから。

「……なんで？」

問い返してきた彼女を、うまく言いくるめたのはガネルオージェだった。

「少しは頭を使え、この馬鹿。ここは荒野でも砂漠でもないんだぞ。こんな街中で、万一にでもお前が力、暴走させてみろ。あっと言う間にお尋ね者だぞ。ついでに言うなら、おれたちはすでに神殿のほうからも手配されてるんだ。両方から追われることになって、逃げ延びられると思うのか？」

この問いに、できると答えられる者がいるとしたら、それはよほどの自信家か、底抜けの馬鹿だろう。

アラクセイトはそうではなかったから――青年の、言葉回しにいささかむっとしたようだが――渋々といった体でうなずいた。

（うまいわ）

顔には出さず、ソラミイノはガネルオージェに内心拍手を送る。

（一見筋が通ってそうなことを、アークの神経逆撫でしながら言って聞かせるなんて……これから、アークを誤魔化したいときには彼にまかせようかしら？）

親友の少女が聞けば、間違いなく「ミイノ、ひどいっっ！」と叫ぶに違いないことを思いながら、ソラミイノはちゃっかり『飴』をあげる役をかすめ取った。

「そういうこと。これは預かっておくわね。でも、驚いたわ。大した進歩じゃない。この調子なら、きっとすぐに、力を使いこなせるようになるわよ」

同い年ながら、優等生で委員長的役割を負うことの多いソラミイノのことを、ある意味姉のように慕っているきらいのあるアラクセイトが、ぱあっと顔を輝かせたのは次の瞬間のことである。

ガネルオージェの視線がこう告げていた。

(うまく宥めたな)

ちらりと見返しながら、ソラミイノが伝えた。

(ちょろいわ)

ほんの数カ月しか組んでいないにしては、彼ら三人の関係はいたって良好なものだった。

ただし、平時においては、との注釈は取り除けなかったが。

では、危急時にはどうなるのか、と言えば。

ソラミイノもガネルオージェも、なるべく考えないようにしている。

考えても仕方がないのと、頭痛なしではできないことだからである。

天然ぽややんな火薬庫少女の封じこめこそが、ふたりの心の平安への近道と言えるのかもしれない。

もっとも、完全にそんなことができる存在があったなら、ふたりとも平身低頭（へいしんていとう）してその極意を伝授してもらうに違いないのだが。

つまるところ。

ありもしない希望に縋（すが）る暇があるなら、現実に道を模索（もさく）するほうが数倍まし、という。

ふたりはそういう、ある種の悟（さと）りの境地に達した同志だったのである。

3

翠泉へ至る道をヴィクティーンは辿っていた。
翠濫にあって、翠泉は聖地――立ち入ることを許された者は少なく、そこに住まうことを認められる者はさらに少ない。
ヴィクティーンは、その稀有なる者に会うために歩くのだ。

翠泉――明るく澄んだ緑をたたえる豊かなる泉。
翠濫の緑と繁栄を支えつづけてきた、尽きることなき水の源。
そこに身を浸すことなど、何者にも許されはしない――だが、それは徒人に限っての話。
徒ならぬ……神に愛される者となれば話は別だ。

現在、翠泉のほとりには、水神の神子が住んでいる。
カンラタールの息子――水神を名付け親に持ち、水神そのひとの真名を直々に与えられた特別な存在が。
そのひとの姿を目にした瞬間、ヴィクティーンは嬉しさと切なさの両方で、胸の奥がきゅっとしめつけられるような錯覚を覚えた。
こちらの視線に気づいてか、青年が振り返り、微笑んだ。
「やあ、ヴィーク」
「こんにちは、ファー」
礼を失さぬ程度の挨拶をかわし、彼女はいつもの場所に腰を下ろした。
街の者たちが勝手に『禊ぎ』と呼んでいる行為を、ファ――ファーリィンが終えるまで待つためだった。
ヴィクティーンは知っている。
ファーリィンの水浴に、特別な意味などないことを。
彼はただ、水と戯れるのが好きなだけなのだ――水霊たちを義理の兄弟に持つカンラタールの息子としてごく当たり前のこととして。
彼は彼である以上の意味は持たない。

いや、確かに『カンラタールの息子』であることは、この翠濫の街にとって奇跡的なことかもしれないけれど。

それでも、ヴィクティーンにとって、ファーリィンはファーリィン以外の何者でもない。彼女にとって、幼なじみの少年が、そのひとでしかないと同じく。

初めて会ったとき、彼はぼろぼろな、痩せこけた少年だった。

戦で故郷と、ひとりを除く家族を失った、怖くなるぐらいに緊張した、『ちょっと怖い、年上の男の子』だった。

父が拾って連れてきたその男の子と小さな子が、どんどん血色よく、健康になっていくのを見るのが、ヴィクティーンは楽しかった。

なぜなら彼女はひとりっ子だったし、ほかの女の子たちが喜ぶような遊びには興味を持てず……だから、男の子の兄弟がいて、一緒に遊んでくれたら、きっと楽しいに違いないと、ずっと思っていたからだ。

案に違えて、彼らが健康を取り戻すにつれ、決して自分には言いつけられることのない仕事を——特にファーリィンが——言いつけられるようになり、一日中一緒に遊ぶという野望は早々に挫かれたのだけれど。

それでも、ファーリィンは自由を許されたときには、ヴィクティーンにつきあって遊んでく

れたし、彼と彼の弟と自分と――三人で過ごせる時間は、彼女にとってかけがえのない大切なものだった。

あの日――彼女が七歳のとき、屋敷で火事が起こるまでは。

あのときのことは、恐らく一生忘れられない。

そのころ、ヴィクティーンとヴァディリンは、『隠れ家』造りに夢中になっていた。

押しつけられる勉強がイヤだったのと、召使たちの繰り返す「そろそろ御立場の違いをご理解くださいまし」という台詞にうんざりしていたのだ。

だから、ヴァディリンとふたりで、こっそり屋敷の屋根裏に、自分たちだけの隠れ家を作った。

ごっこ遊びと本気と――半々の、子供じみてはいたけれど、当時は懸命の意思表示だった。

いまなら、あんな遊びはするべきでなかったと、わかるのだけれど。

けれど、あの当時、そしてあの午後――そんなことは想像できなかった。

いつものように召使たちの目を盗んで、屋根裏で落ち合って、持ち寄ったパンやお菓子や野菜の酢漬けを披露して――。

自分たちを探す声すら『隠れ鬼』の遊びの材料にした。

その結果、起こったことは――否、明らかにされた事実は。

「あんな火事さえなければ……そして、わたしたちが逃げ遅れたりしなければ、ファーリィンがこの街に縛りつけられるようなことはなかった……のよね」

いまさらだとわかっていても——いくら悔いても悔い足りない。

あの日、ファーリィンはヴィクティーンとヴァディリンの命を救うために、それまで自身でも完全には把握できずにいた、『カンラタールの息子』としての能力を発揮したのだから。

その事実がもたらした反応は大きかった。

不幸にも、翠泉は当時、枯渇寸前の状況にあった。

雨を呼び、火事を消した少年は、『水神の神子』として、街中が担ぐ神輿の上に奉られた。

兄とも慕っていたそのひとが、周囲の大人たちの手によって、『気高い、たやすく触れてはならぬもの』に祭り上げられたときのことを、ヴィクティーンは忘れてはいない。

だが、そのことを、自分以上にきつく、重く捕らえた者がいたことも……彼女にはわかっていた。

恐らくは、ファーリィン自身も。

そんなことはないよ、とファーリィンは微笑む。

微笑んで、ヴィクティーンの胸のうちにたまった鬱屈を晴らそうとしてくれる。

けれど、本当に彼がそうしたいのは、自分ではないのだ。

わかっているから、切なくて、胸が痛くなる。
こんな顔をさせたいわけではないのに――。
（ヴァディの馬鹿……）
そう思ったときのことだった。
突然、なにも――誰もいないはずの空間から、ヴィクティーンに向けての声がかけられたのは――。
『ヴィクティーンさん』
それは、空から降ってきた三人のうちのひとりの――少女の声だった。
あまりの意外さに目を瞠った彼女に、声は淡々と語りつづけた。
すなわち、この街について詳しい事情を説明してもらえないか、と。
言うだけ言って、ぷつりと声が途切れた後、彼女は呆然とつぶやいた。
「そんな……イーオダールの息子じゃないって……ただの聖石の子供だって、そう言ってたのに……」
それとも、聖石の子供なら、皆こんな不思議を操る力があるのだろうか……？
思い迷うヴィクティーンに、ファーリィンは微笑みながらこう告げた。
「少なくとも、ただの、ではないだろうね」

だとしたら、道は開けるだろうか——目の前の、大切な青年を、こんな美しいばかりの牢獄から解放するための方策を見つけることができるだろうか……？

ファーリィンはなにも言わなかった。

だから、ヴィクティーンは自分で考えなければならなかったのだ。

さて、その数日後——。

ヴィクティーンとの打ち合わせ通り、ソラミイノとアラクセイトが翠濫市街見物に乗り出す予定の日を迎えた朝のこと。

アラクセイトが不調を訴えた。

疲労のせいの体調不良か、あるいは風邪か——といった程度のものだったが、すっかり寝台の住人になってしまった少女は、「頭痛い、体だるい、関節痛い……でも、起き上がると寒くて気持ち悪い」を繰り返すばかり。

これが冬……いや、せめて春先であったなら、少しもおかしいことはなかったのだが、いささか季節は巡りすぎていた。

「まったく……」

両手を腰にあてて、呆れたようにソラミイノが文句をつけた。

「夏風邪ひくのはなんとやら……って言葉、知らないわけ？」

病人相手に、酷と言えば酷な言葉だったが、アラクセイトも負けてはいなかった。

「風邪じゃないもん」

もっとも、そう主張する少女の頬は熱で上気し、声を出すのも苦しげな様子を見るだに、ただの負け惜しみと見えなくもなかったが。

「あー、はいはい。そうよね、あんたはここ数カ月の間に、何度も死ぬ目にあってきたんだもんね。悪かったわ、体が弱ってたら、病気にだってなりやすいもんね」

口調の軽さはともかくとして、ソラミイノとしては、改めてここ数カ月のことを思い出した結果、アラクセイトの体調不良の原因が、本人の不摂生などではないことを認めて詫びた。

故郷の神殿を後にして、一年弱――その間に何度、アラクセイトが死にかけたことか。

いや、死ななかったのが不思議なほどの試練を、何度乗り越えてきたことか。

実際、肺炎をこじらせて死にそうにもなったし、喪月神の瘴気にあてられて仮死状態同然にもなったし、その後も何度も何度も命のかかる状況に押しやられて……。

それでも無事に生き延びてきたのは、彼女の生来の力と意志があればこそ――だろうが、よ

くよく考えてみれば、ここまで心と体に負担をかけつづけてきたのだ、体調が万全であるはずがない。

緊張が解けた途端、それまで元気だった者が寝込むことは珍しくない。

（きっと、それね）

甘やかした挙句、怠け心を育てさせては大変と――心根はともかく、アラクセイトにはまだまだ精進してもらわなければならなかったので――「夏風邪ひくなんて、この未熟者」と決めつけ、そうではないという不屈の意志でもって、さっさと回復してもらおうと、ソラミイノは考えていたのだけれど。

いつもなら「馬鹿馬鹿言わないでよ」と文句を垂れて、それでおしまいになるはずのアラクセイトの反応が、今回は少々違っていた。

「ここ……この街、気持ち悪い……」

「アーク？」

「歪んでるっていうか……頭のなか、ぐるぐる指でかきまわされてるみたいで……」

うっ、とアラクセイトが口元を押さえるのを見て、ソラミイノは即座に反応した。

右手で親友の首を支えると同時に、左手で空の洗面器を少女の口元に運んだのだ。

「……ありがと」



つぶやき、見上げてきた少女の、黄橙色の双眸には涙がたたえられていた。

「ミイノ、この街って、なんだか変だよ」

再び吐き気に襲われたのか、アラクセイトが洗面器を引き寄せた。

その後続いた音には耳を塞ぎ、ソラミイノは簡潔な答えを返した。

「そうね、調べてみないとね」

4

結局、市街見物の役目は、ガネルオージェが受け持つことになった。翠濫側の誠意――一応の、という注釈はつくが――を疑うわけではなかったが、ソラミイノひとりを案内役の者たちに任せるのが躊躇われたのがひとつ、もうひとつは、アラクセイトの「この街変」発言のせいである。

領主館より市街が歪んでいるという保証はないが、もしそうだった場合、より負担がかかるのはソラミイノのほうだとわかりきっているからだ。

万一、街中でソラミイノの気分が悪くなりでもしたらと思うと、いまひとつ信用のおけない案内役と一緒では不安が残る。

その点、ガネルオージェにはそうした心配がない。

気の流れや歪みに敏感に反応する少女ふたりに比べ、ガネルオージェは鈍感である分、そういったものの影響を受けにくい体質の主だった。彼の師匠である青玉と紅玉の使徒たちが、や

はりそうだったことを考えると、あるいは硬度の高い聖石を抱いて生まれてきた者に共通する特徴かもしれない。

なにより、アラクセイトをひとりにはしておきたくない、というのが大きい。普通、未婚のしかも約束を交わしたわけでもない男女が、寝台のある部屋でふたりきりになることは、褒められることではないのだ。

さまざまな意味において、この役割交換は理に適ったものだった。

唯一欠点があるとしたら、この街の奇妙な歪みの原因が、市街にあったとしても、ガネルオージェでは感知できないということだろうか。この件に関しては、アラクセイトの体調が戻り次第、今度こそ少女ふたり組による市街見物を決行することを話し合っていた。

もっとも、本音を言うなら、早々にこの街を離れ、当初の目的地である王都を目指したいのだけれど。

彼黄の王都には、ソラミイノの叔父であるひとが、神官長として住んでいるのだ。彼女の一族のなかでも、かなりの発言力を持つこのひとは、しかし一族きっての変わり者としても有名で、さらに彼女のことを大変に可愛がってくれていた。

つまり、彼に口利きを頼むことで、一族によるアスカニーリ神殿総出の『家出娘捕獲作戦』を中止してもらおうという計画なのだ。

そのためにも、早急に王都に向かう必要があるのだが……。
アラクセイトには気づかれないように、ソラミイノは小さく息をついた。
（問題は、この足止めがどんな意味を持っているか、よね）
現実的なそれなら、もう想像がついている。
イーオダールの子供たちの力を借りて、空中移動していた自分たちをはたき落としたのは、間違いなくカンラタールの子供たちだ。
理由もわかっている。
彼らの結界のそばを、よりにもよって、相性最悪な火神――イイタールの娘が通りすぎようとしたためだ。
単にそのことが気に入らなかったのか、それとも神経過敏になっていたせいかまではわからないが、まず間違いないだろうとソラミイノは踏んでいる。
通常、水は火に克つものとされている以上、水神の子供たちが火の気に過敏に反応することはないはずなのだが、反応せざるを得ない要素を、親友の少女が山ほど背負っていることを考えると、叩き落とされただけですんだ分、まだまし、とまで思ってしまう。
（イイタールの娘で、石墨の子供で、しかも命がかかった場合に限るとは言っても、金剛石生んじゃう子、ではねえ……）

石墨も金剛石も、燃えるという特質を持っている。
しかも、自然界に存在するそれらの石以上の力を秘めた『聖石の子供石』なのだ、アラクセイトが内に秘めているものは。
（いくら気の質として勝ってるとは言っても、歩く活火山見たら、そりゃあ警戒もするわよねえ……）
親友が聞けば、またしても「ミイノ、ひどい」とぼやくこと確実なことを考えながら、ソラミイノはふと、新たな危険性に気づき、眉宇をひそめた。
イイタールの娘――あるいは息子――が、周囲から真実祝福されるのが、北方の地に限られることを思い出したのだ。
極寒の地において、温もりと光を与える炎の恩寵は、生死に関わる重要且つかけがえのないものだ。
けれど、この翠濫のような、以前はともかく、現在ではさほどに強い水の加護のない土地においてはどうだろう……？
強過ぎる炎は、水を駆逐してしまいかねない。
いや、当事者にそんなつもりがあろうとなかろうと――少なくともアラクセイトには、そんな気はかけらもないことはわかっているけれど――この街に暮らす人間の誰かひとりでも、そ

の危険性に気づいたとしたら……。
（まずいなんてものじゃないわね）
しかも、自分も似たようなものなのだ。
イイタールの娘でこそないけれど、発火能力はあるわ、持ち前の聖石は砂金水晶で、明らかに『火の宮』に属しているわ……。
穿った見方をすれば、自分とアラクセイトは、この街の水源を枯らすために差し向けられた敵と捉えられかねないのだ。
（まずい……まず過ぎるわ）
胸中でつぶやき、ソラミイノはアラクセイトに向き直った。
なにがなんでも、これだけは言っておかねばならなかった。
「いい、アーク!?　これだけは言っておくけど、あんたがイイタールの娘だってことだけは、絶対、絶対、口に出しちゃ駄目よ！　もちろん、そうと気取られるような言動も厳禁！　いいわね、わかった!?」
子供に言い聞かすような物言いに、かちんときたのか、アラクセイトが唇を尖らせた。
「そんなの、言われなくったってわかってる……けど」
不安げな、語尾のかすれ具合が、ソラミイノの不安を誘う。

「……けど？」

「なんか、そこのところ、重点的に攻められてるみたいな気がする。暴れろ、暴れろって煽られてるっていうか、神経に直にヤスリをかけられてるみたいな感じがするっていうか。すっごく、ヤな感じ」

それはあまりにも不穏な告白だった。

（誰かが、アークの力を暴走させようとしてる……？　アークの力のことを知って？　それとも、過小評価してのことかしら……）

どちらにしても、不穏なことに変わりはない。

楽観的に見るなら、病気のせいで気弱になった彼女が、そんな錯覚を覚えただけ、と言えなくもないのだけれど。

それは、まずあり得ない。

ずっと、一緒に生きてきたのだ。ただの気の迷いかそうでないかの違いぐらい、わかる。

（だとしたら……）

現実に、いるのだ——抵抗力の弱まったアラクセイトを刺激することで、彼女の力を暴走させ、そこで生じる混乱に乗じて、なにかを企んでいる者が。

そうと認識した瞬間、ソラミイノは頭のどこかで、ぷつん、となにかが切れる音を聞いた、

と思った。
いや、自ら切ったのか。
（上等じゃないの）
ぎゅっとこぶしを握りしめ、彼女は冷やかな笑みをたたえた。
宣戦布告された以上、これは受けて立たねばなるまいとの思いからだった。
傍からはそうは見えないが、実はソラミイノは好戦的な性格の主だった。
勝算が立つまで、決していきり立つことがないため、皆彼女のことを温和な性格だと思いがちなのだが、これはとんでもない誤解だった。
彼女のことをよくよく知る者たちは、間違っても彼女を怒らせようとはしない。
そして彼らは、彼女の逆鱗の在り処も把握しており、決してそこを刺激しようとは思わないのだ。
その逆鱗とは、彼女自身ではなく、彼女が懐に入れた者。
そこを突つかれたが最後、雛を抱えた親鳥同然に、彼女は敵を排除する。
この時の彼女は、まさにそういう状況だった。
親友を陥れようとする、見えない敵を見据えるべく、彼女は決意を固めたのだ。

露台から入ってきたヴィクティーンは、待っていたのがソラミイノとアラクセイトだったことに少なからぬ驚きを覚えたように見えた。

無理はないかもしれない。当初の予定では、彼女が会うのはガネルオージェのはずだったのだから。

「ごめんなさい、勝手に顔ぶれを変えちゃって……わたしが熱出しちゃったもんだから……」

寝台に半身を起こしたアラクセイトの言葉に、なるほどとばかりにうなずいたヴィクティーンだが、心なし顔色が悪いように、ソラミイノには思えた。

(焦(あせ)ってる……？　突然予定が狂ったから……それとも、なにか不安があるのかしら)

現在の時点では、判断しようがない。

なにしろ、基準にする情報がほとんどないのだから。とはいえ、彼女のこの反応は、覚えておく価値がありそうだと、銀髪の少女は声なく独(ひと)りごちた。

ソラミイノの胸中に気づいた様子もなく、ヴィクティーンはかぶりをふった。

「いいえ、そんな……ただ、あの方にお会いしたらまず、なんの聖石を抱いて生まれてらしたのか、お尋ねしたいと思っていたものですから……」

それはおふたりにお聞きしてもよいことなのでしょうか――？
重ねられた問いに、思わずふたりが顔を合わせたことは言うまでもない。
（あいつの聖石がなんだったのか、ですって？　そんなの……）
正直に口にできるはずがない。
あれはああ見えて、いまのところ世界でひとりだけの金剛石の子供なんですよ――など。ひとに知れたら、自分たちごと、どんな厄介に巻きこまれるか、知れたものではないのだ。
もっとも、いまのところは、自分たちの問題に、彼を巻きこんでいるわけだが……それについてはソラミイノは、自分に都合のいい解釈をすることにやぶさかではなかった。
（ま、あいつはこっちが握ってる、お師匠たちの子供石欲しがってるんだから、ある種の契約関係が成立してるってわけよね。……にしても、なんだってあいつはさっさと使徒になっとかなかったのかしら）
本人にいくらやる気があろうとも、必ずしも使徒に選ばれるわけでないことを、彼女は意図的に忘却の彼方に追いやった。
（そしたら隠す必要なくて、面倒が減ったのに）
使徒に選ばれた者は、神殿所属の身とされる。
仕事やら面倒やらを押しつけられるのは確かだが、よほどの事態にでも陥らない限り、身の

安全は保証されるのだ。

実を言えば、この時点で彼女を含む三人は、アスカニーリ神殿開闢以来、ついぞ前例のない三人以上の神々の加護を約束された使徒として認定されていたのだが、当事者たちだけが、まだその事実を知らずにいた。

なぜか——簡単である。

全然、神殿に立ち寄っていないからだ。

そういうわけだから、ヴィクティーンの質問にどう答えるべきか、ソラミイノは非常に頭を悩ませた。

なにしろ、こんな質問は予想外だったからだ。

正直に答えるなど、まず論外。しかしあからさまに嘘くさい答えもよくはないだろう。

（ここは何とか答えを保留して、それであちらの思惑がどこらへんにあるのか探った上で、対応を考えて……）

などと思いつつ、うまい言葉を探しながら、ヴィクティーンに答えようとしたソラミイノは……先を越された。

「それは……相談しないと答えられませんけど……もう一度、こんな風に来ることって、ヴィクティーンさん、できますか？」

もしできるなら、次の機会には答えを準備しておくと、アラクセイトは言外に告げたのだ。

（この馬鹿、考えなしっっ！）

声には出さず、盛大に親友を罵倒したソラミイノだったが、ヴィクティーンの次の言葉に目を瞠った。

「ではせめて、これだけは教えていただくわけにはいきませんでしょうか……？　先日示されたみなさまの奇跡は、石そのものに宿る力を源としたものなのでしょうか、それとも……？」

「みなさまの、なんて言われると背中が痒くなっちゃうな。あれってば、ガネルさんやわたしたちのお師匠さまからもらった石の力、借りただけだし。だから、わたしたちに特別な力とかがあるわけじゃなくて、単にお師匠さまやそのお友達が、凄いってだけの話で……まあ、なんたって、みんな使徒さまだから、石に宿る力が凄いのも当たり前といえば当たり前なんだけど……」

（ああ、もう、また、余計なことをぺらぺらと……）

喋りやがって、こんちくしょう――というのが、ソラミイノの正直な感想だった。

もし室内にヴィクティーンがいなければ、アラクセイトの体調のことも忘れて、力いっぱいこぶしを見舞っていたかもしれない。

しかし、彼女はすんでのところで、理性的に振る舞うだけの分別を残していた。

同時に、ヴィクティーンにはもはやそれは残されてはいなかったのだ。

「無茶な願いだと、重々承知の上で、申し上げます……！」

胸の奥から絞り出すような声で、彼女は縋るような目を、ふたりに向けてきた。

「貴重な石であることは存じております……けれど、敢えて、お聞き届けいただけませんか？　カンラタールの子供たちが喜んで従うほどの力を秘めた聖石の子供石を……もし、お持ちなら……そのいくらかを譲っていただくわけにはまいりませんでしょうか……!?」

意外すぎる申し出に、目を瞠りながらソラミイノは、心の手帳に書きつけた。

（鍵はカンラタール。望まれているのは水に連なる媒介）

けれど、なぜ――？

と、彼女は疑問を抱いた。

翠泉の恵みは尽きてはいない。往時に比べれば、確かに水の加護は弱まっているに違いない……けれど。

即席の力を必要としているとも思えない。

（これは……考える余地があるかもしれないわ）

と、ソラミイノは思った。

（いえ、考えなければならないことなのかも……）

しれないと、彼女は思った――。

5

一方、市街見物に出かけたガネルオージェは、窮屈な思いを味わっていた。
案内役がつくとはいっても、当初予定されていたソラミイノではなくなったわけだし、せいぜいひとり、多くてもふたりぐらいだろうという彼の予想は完全に裏切られた。
彼を案内するために選ばれた人数は五人。
どう考えても普通ではなかった。
(こいつは……)
おとなしく、説明に耳を傾けているふりをしながら、彼は胸中でつぶやいた。
(護衛や案内役というより、見張りだな)
と――。
一瞬なりとも、ガネルオージェから目を離そうとしないのがいい証拠だった。
(ああ？　あのガキども見捨てて、おれが逃げ出しかねないとでも思ってやがるのか、こいつ

ら？）

と、思った瞬間、それもいいかもしれないと思ってしまったあたり、彼には相手を責める権利はなかったかもしれない。

しかし、ちらりとそんなことを考えたとしても、彼にはそうしない……否、できないだけの理由があった。

ソラミイノたちと交わした『約束』があるからだ。

自身の能力の暴走を防ぐため、彼は師匠たちの生み出す『聖石の子供石』による封印が必要なのだ。

ところが、当の師匠からは破門されてしまった。

以前と同じように、彼らから封印のための青玉と紅玉をもらうことはできない。

そこで思い出したのが、現在行動をともにしている少女ふたりのことだった。

アラクセイトとソラミイノ――。

かつての師匠たちの古馴染みである血赤珊瑚と黒珊瑚の使徒のふたりを師匠に持つ、さわがしくてやかましくてうるさいガキども。

なのに、自分の師匠のひとりが窮地に陥った際、まぐれと運を総動員して、彼の危難を救ったことで、『礼』として、彼らの子供石を譲られた者たち。

彼女たちから約束の石を受け取るまでは、多少厄介な事態に巻きこまれることになろうとも離れるつもりは皆目ない。

だから、ひとりだけ逃げ出すような可能性は考えなくてもいいんだよ――と、まるで押しつぶしそうな迫力で、自分を囲んでいる男たちに言ってやりたい気分に襲われたが、結局彼は言わないことにした。

親切そうな顔を装っているからといって、彼らが本当に親切な意図でもって、自分のそばについているとは限らないし、どうも、そうとは思えない感じを受けたからだ。

(だいたい、案内するだけの役目なら、ひとが露店覗きこむたびにいちいち、周りと会話させないよう、意識的に動くはず、ないもんな)

明らかに彼らは、ガネルオージェと他者との接触を防ぐ意図をもって行動しているのだ。

(この街の上の連中は、なに考えてるんだかな)

いくら聖石の子供の利用価値が高いとはいっても――しかも、三人もいるのだから無理はないと言えないこともないが――囲いこんだ程度でどうにかなるとでも思っているのだろうか？

だいたい、自分たちがその気になれば、空を飛んで逃げられるとは思わないのだろうか。最初に出会ったあの女性は、自分たちが空から降ってきたことを、上の者には打ち明けていないのか……それとも、カンラタールの子供たちに叩き落とされたことまで把握し、だからこそ安

心しているのだろうか……。

今回、ヴィクティーンと会うために、あれこれ細工が必要だったことを考えると、彼女が手持ちの情報のすべてを、上に報告していない可能性は低くない。

だが、だとしたら、街門を通らずに翠濫に入りこんだ自分たちのことを、彼らはどう見なしているのか……。

（一番ありそうなのは、事情ありという線か……）

そうなら、上層部が自分たち三人を取り込むのはたやすいと、思っただろうことは想像がつく。

保護と引き換えに、街への尽力を求めれば――あるいは脅せば――まだ若い『子供』など、簡単に手懐けられるとでも考えたか……。

非常に不愉快だったが、その線が濃厚そうに思えた。

ふたりの師匠と旅しているころにも、何度かそういうことがあったのだ。

彼の師匠たちは、れっきとした使徒だったのだが、扱いの難しい仕事を回されることが多かったため、そのことを隠して行動することが多かった。

さらには、師匠の片割れは、女性でも滅多に見ない整った容貌の主であり、外見通りか弱いに違いないという、とんでもない誤解を周囲に植えつける厄介な人物だった。しかも、自分は

自分で、少々特殊な環境で育ったせいもあり、実際の年齢より若く――あの当時は幼く、と言ったほうが正確かもしれない――見られる傾向にあった。

結果として、彼ら三人は、美しくいかにも繊細な青年と、吹けば飛ぶような貧弱な子供と、恐らくそのふたりに雇われたのだろう腕に覚えのある剣士――と、見なされることが多かった。

そう誤解した連中が次に考えることといえば、いつもいつもお定まりで……。

護衛の剣士さえ排除できれば、残るふたりはどうとでもなる――だった。

そんな不幸な勘違いをした連中が、二度と後悔もできない目にあわされるのを目にしたところで、ガネルオージェは一片の哀れみも覚えはしなかったが……。

知らず、過去の思い出に心を馳せていた彼は、そこでふと引っかかるものを覚えた。

三人中、厄介に見えるのはひとりきり、という点では、現在の自分たちと似てはいないかと気づいたのだ。

だとしたら、自分を排除することで、上の連中は、あのふたりの少女を手中に収められると思いこんでいる可能性も出てくる。

もっとも、火神の娘と、それに限りなく近い属性を持つ彼女らを、この水の街が抱えこんだところで、なんの役に立てるつもりかはわからないが……いや、そのあたりのことはうまく誤

魔化したわけだから、そうと気づいていないだけなのかもしれない。
さて、なかなか判断が難しくなってきたぞ――と、彼が思ったときのことだった。
「火事だ！」
切迫した男の叫び声が耳に飛びこんできたのは。
ガネルオージェは反射的にその声のほうへ走り出した。
ここ数カ月の内に身についてしまった反射行動である。
火事とはすなわち、同行者のイイタールの娘の力の暴走――という、あまり一般的ではない刷り込みが出来上がっている。
本人が聞けば「ガネルさんまで……ひどい」とでも言うだろうが、まぎれもない事実であるから、彼女に弁解の余地はない。
とはいえ、思わず駆けだしたガネルオージェにしても、途中で、今回に限ってはその可能性はとことん低いことに気づいた。が、気づいたときには、すでに炎が見えるところまで近づいていたので、いまさら離れる気にはならなかった。ひとの流れに逆らって戻るには、いささかどころでない体力の消耗を覚悟しなければならなかったのが理由のひとつ。
もうひとつは――。
地震が少ない土地ならではのことだろうが、炎に包まれていたのは五階建ての建物で、その

かなり上の階の窓から、子供が助けを求めて泣いているのを見てしまったからだ。

黒髪の、十二、三の少女だった。

炎に追われ、いまにも飛び下りそうな少女を、周囲は必死に押しとどめようとしていた。

なにしろ、彼女が飛び下りた場合、その衝撃を和らげる緩衝材のたぐいは、いっさいなく、そうである以上、それを用意するまで、彼らにできるのは、その準備が整うまで、彼女が早まらないよう、宥めること以外なかったのだ。

とは言え、恐怖に陥った少女の心が、それまでもつという保証はない。

いつ、恐怖に突き動かされ、飛び下りるかもしれない。

そんな光景は、絶対にガネルオージェは見たくなかった。故郷にいる腹違いの妹が、やはり黒髪だということで、尚更そう思ったのかもしれないが。

（イーオダールの子供たちに頼めば、少なくとも落下時の衝撃を和らげることはできるだろうが……）

だが、風には炎を活性化する性質がある。

風に乗って火の粉が飛び散り、挙句大火事を引き起こすというのでは本末転倒というものだ。

同時にカンラタールの子供たちを呼べればいいのだろうが、いかんせん、この街の水の気は

あまり強くない上に、少々の餌――水属性の聖石の子供石に宿る力のことだが――では靡きそうにない、頑固なこだわりを抱いているきらいがある。

それこそ、連れの少女たちの師匠のひとりの子供石――黒珊瑚でも持ち出せば、あるいは多少のわがままぐらいは聞き届けてもらえるかもしれないが、生憎それはソラミイノの固い紐で結ばれた巾着のなかにしかない。

「おい」

ようやく追いついてきた『案内役』の男の胸ぐらを摑み、ガネルオージェは有無を言わせぬ迫力で問いかけた。

「この街で、一番カンラタールの子供たちに影響力を持ってるやつは誰だ？」

そういう存在がいることはわかっている。

ガネルオージェ自身は鈍感で、そういった微妙なことを読み取ることには長けていないが、幸いにも同行者の少女たちは、そちらの方面では大活躍状態にあるのだから。

「そ、それは……」

答えかけた男は、しかし逡巡の色を示した。

よそ者に、街の大事を教えることに対するそれ、なのだろう。

だが、そんな彼の心中にかまっている余裕はなかった。

「街中大火事になってもいいのか!?」
ガネルオージェの脅しに、男は悲鳴でもって答えた。
「カンラタールの神子が……」
「どこにいる!?」
「でも、間に合わない……今から呼びに行っても……」
「いいから、どこにいるのか答えろ!」
叩きつけるようなガネルオージェの言葉に、半ばあやつられたかのごとく、男は答えた。
「……翠泉のほとりに……」
「わかった」
短く答え、ガネルオージェは懐をまさぐった。
いま、必要なのは、風霊たち——イーオダールの子供たちを動かすための、極上の子供石だった。
彼らが好むのは、青や紫をたたえる石——。
(手持ちのなかで残ってるのは、杉石と紫水晶と……青玉、か……)
できることなら、青玉に関しては使いたくないというのが本音だった。
いつ暴走するともしれない自分の力のことを思えば、保険は取っておきたいではないか。

しかし、事情は切迫している。

少女を救出すると同時に、切り札である『カンラタールの息子』を、ここに連れてこさせようと思えば、手持ちの石のほとんどを使わざるを得ない状況にあるのは明らかだった。

「……ったく」

仕方ない。

そう、思い決め、懐に手をのばしたガネルオージェは、しかし、思いもつかぬ力に溢れたなにかに触れ、びくりと震えた。

（なんだ……いったい!?）

痺れる指先で、取り出したもの――それは。

先日アラクセイトが取り出し、彼らに見せた、半分石墨のままの、中途半端に青金剛石に変化した石、だった。

鈍感この上ないことに関しては――いや、決して自慢できるたぐいのことではないのだが――人後に落ちない自信を持つガネルオージェですら、それに宿る圧倒的な力を感じることができた。

連れの少女の片割れの、とんでもなさにはいいかげん、耐性がついたと思っていたのだが、どうやらまだまだ足りなかったらしい。

それでも――。

（これを使えば、両方一発で片がつくな）

あっさりと割り切って、彼は石を空にかかげ、風霊たちに願いを伝えた。

あの少女の命を救うことと、この騒ぎの収束に必要な人物をこの場に早急に連れて来ること――。

風霊たちは嬉々として彼の頼みに応じた。

瞬く間、というには大げさだが、奇跡的な速さで、火事の現場に『カンラタールの息子』である青年を連れてきてくれた。

その後は、あっと言う間だった。

炎は勢いを失い、延焼することなく治まった。

住人たちはみな、カンラタールとその息子である青年をたたえる言葉を口にした。

その光景を目にしながら……ガネルオージェは、なんとはない居心地の悪さと、罪悪感に似たものを覚えていた。

大火事の危険から免れた、翠濫の住人たちが、救い主をたたえ、感謝するのは理解できる……というか、当然のことだと思うのだ。

感謝を捧げられた『カンラタールの息子』とやらが、少々疲労した様子ながら、微笑み、応

じるのも……おかしなことではない。
あれだけの火事を消したのだ、多少の消耗は無理からぬことだとわかる。
けれど、なぜか――なぜだか。
それ以上の負担をかけられ、消耗したように思われてならなかったのだ。
さらに――。
自分に向けられる、明確な――殺気を感じた。
(なんだ……?)
素早く周囲に目を向けたが、それらしい人物を見つけることはできなかった。
この段になって、ガネルオージェも、連れの少女の「この街変」発言に、同意せざるを得ない心境に至った。
確かに、この街は変だった。
どこがどうとは言えないが、それだけは間違いなかった。
(だが、おれたちになんの関係がある……)
という思いがあったのも確かだった。
彼はお世辞にもお人好しと言われるような性格の主ではなかったし、今回のような、ごくごく例外的な事態を除けば、世のためひとのため、身を粉にして働くような人物でもなかった。

だから、このとき、彼が考えたのは最も後腐れのない、早急な退却戦術だった。
すでに手遅れとも知らずに――。
ある意味哀れなことである。

思いがけず、懐かしいひとの姿を目にすることができた。
懐かしく慕わしい……自分にとっては世界そのもののようだった、あのひと。
引き離されてから、どれほどのときが経ったことだろう。
(生きていて、くれた……)
それだけのことが、純粋に、ただ嬉しい。
けれど同時に、この街に対する怒りが噴き出してくる。
水神の加護を願うと言いながら、実のところ、あのひとにわがままを押しつけ、ただ負担のみをかけつづける街の者たち。
恩を受けた街のためだからと、かのひとが必死に水神の加護を引き寄せても、往時の繁栄には及ばぬからと、恥知らずにもさらなる恵みを望み、そのためにかのひとが努力するのを当然

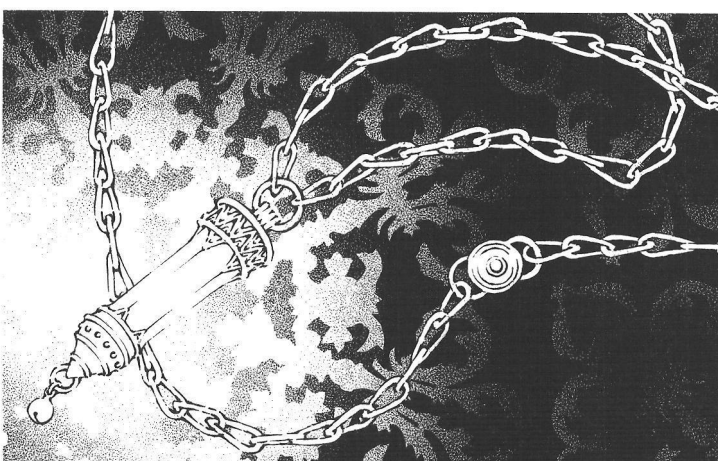
だと言い切る厚顔な者たち――。
彼らの節操のない望みのために、かのひとがどれほど自らを削ることになったことか。
だのに、それを強いた者たちは、自らの行為の意味に無頓着でありつづけるのだ。
最も輝かしかった時代の翠濫――当時の栄光を取り戻すことなど、すでに不可能だというのに――。
認めようとしない者たちが、寄り集まって彼に無理を言い立てる。
(あれでは……あのひとは、擦り切れて、つぶれてしまう……)
だから、なんとかしようとした。
幼なじみの少女とともに、なんとか彼をこの檻のような世界から、解放しようとしたのだ。
けれど、うまくいかなかった。
自分たちは幼なすぎて――未熟すぎて、単純で乱暴な方法しか思いつくことができなかった……。
暴力でもって彼を解放できるなどと信じていた。
計画は、決行以前に崩壊した。
内応者がいたからなのか、単にこちらの計画が杜撰だったせいなのか――それはわからない。

はっきりしているのは、その結果だけだ。
翠濫全体を脅かす陰謀に加担したとして、自分は永久追放の刑を言い渡された。
本来なら死刑なのだと、『あの方』の縁故なればこその恩赦なのだと——だから、この判決に感謝し、二度とこの地に戻って来るなと……そう言われた。
うなずけるはずがないというのに。
事実、自分は戻ってきた。
そして、以前同様この街のためにその身と命を削るように、奉仕している彼を見た。
(もうたくさんだ)
と、彼——ヴァディリンは思った。
(あいつらは、全然努力していない!)
困ったことが起こると、すべてを神に頼り、そのことを羞じてもいない!
(腐った街、腐った住民ども……)
なのに、彼ともうひとりの、たいせつな存在をそんな地獄から救い出すことすら自分にはできないのだ……。
「なんて……」
おれは無力なんだ——と。

叫んだ青年の傍らに、幻のような少年が現れたのは、次の瞬間のことだった。
その髪は純粋な銀、その瞳もまた純粋な……。
「助けたい……？　そのひとのこと、本当に助けたい？」
「決まってる！」
と、彼は答えた。
少年は、心底嬉しそうな笑みをたたえ、こう告げた。
「じゃあ、手伝ってあげるよ」
と――。

――つづく――

玻璃(はり)の籠(かご)



プロローグ

樹翁大陸の南端に位置する楠下国の西北部――爽椋は、国内における避暑地として名高い地方である。

背後に山脈が控えているため、夏場にあっても強烈な気温の上昇が見られない。それでは冬はさぞ厳しかろうというひとも多いが、実のところ、それは正確ではない。

山脈の麓であれば、もちろん、それなりに寒さも厳しかろうが、すこし離れれば、温泉地があり、かえって過ごしやすいほどだ。

厳しい夏の暑さと、冬の寒さの両方から逃れられるとあって、国内はもちろん、近隣の国の貴族にも、この地に別荘を構える者は少なくない。

また、その恵まれた条件ゆえに、爽椋は保養地としても有名だった。

病を抱えた者、あるいは健康上問題のある者の多くが――ただし、経済的に豊かであることが条件だが――この地を訪れ、日々を送っている。

ウィランシーダも、そのひとりだった。
ウィランシーダは九歳。
だが、とてもそうは見えなかった。
手足は細く、しかも血色が悪い。また、些細なことで熱を出す小さな体は、成長が遅れ、実際よりふたつは彼女を幼く見せていた。
なにより、身を包む生気というものが、圧倒的に薄い。
彼女を目にした者はまず例外なく、その先の短さを確信し、胸の塞がれる思いを嚙みしめることになる。
その日、彼女ははしゃいでいた。
いつも仕事で忙しいお父さまと伯母さまが、ウィランシーダに会いに来てくれたからだ。
ウィランシーダの家は、ここではない。楠下の……もっと東の方――寿桑という街にある。
彼女のお父さまはその街を中心に、たくさんのひとたちのために、働いていらっしゃるのだ。
亡くなったお母さまによく似た、やさしい伯母さまも、そう。
もっとずっと幼いころは、ウィランシーダも寿桑に住んでいた。
ただ、どんどん体の調子が悪くなってしまったものだから、ウィランシーダだけ、この別荘に『引っ越す』ことになったのだ。

本当はいやだったのだけれど、そう口にすると、お父さまも伯母さまも、とても悲しそうな顔をなさるので、強く言い張ることができなかった。

我慢するのには慣れていた。

少しでも冷たい風に当たったら、すぐに熱を出してしまう体。ちょっとはしゃいだだけで、何日も起き上がれなくなってしまう……この体。

しかも、そんなことになったとき、罰を受けるのは自分だけではないのだ。

世話をしてくれるばあや、優しい声で本を読んでくれるねえや——苦しみが去って、意識を取り戻したとき、必ずと言っていいほど、そんな誰かの顔が見えなくなっていた。

だから、ウィランシーダはここに『引っ越す』ことにうなずいた。

よくなったら……他の子供たちぐらい丈夫になったら、大好きな『お家』に、戻れるのだから、と自分に言い聞かせて。

「爽椋に行けば、きっとよくなるから」

「そうですとも、すぐによくなるわ」

大好きなふたりにそう言われて、うなずいた。

これまで、お父さまと伯母さまの言うことに間違いはなかったからだ。

けれど、淋しくはあった。ただでさえ忙しいお父さまと伯母さまに会う機会が、格段に減っ

てしまったのだから。
体がよくなれば、『お家』に戻れる。
そうしたら、もっとお父さまと一緒にいられる。伯母さまにも、きっと会いに出かけることも許してもらえるはず……。
だから頑張って、早くよくなるようにお医者さまの言いつけも聞いて、無理したりせずにいるというのに……。
なぜだろう——最近、以前よりずっと、体に力が入らなくなったような気がする。
食べてもすぐに気持ちが悪くなって、もどすことが多くなった。
変だな、と思った。
けれどお父さまを疑ったわけではない。お父さまや伯母さま、が間違ったことをおっしゃるはずがないのだから。
だけど。
少しだけ不安で……だから、今日こそはお父さまに尋ねてみようと、ウィランシーダは心に決めたのだ。
お父さまの言葉が間違っているはずはないのだから。
お父さまが約束してくだされば、それは絶対に現実になるものだから。

だから、ウィランシーダはその日、父であるひとに無邪気（むじゃき）に約束をねだった。

「早く……わたし、お家に帰りたいわ。元気になって、お友達を作って……ねえ、お父さま、きっと、そうなりますよね？」

問いかけた少女に、その父親である男性は「もちろんだとも」と答えた。

その言葉に安心し、ウィランシーダはにこりと微笑（ほほえ）んだ。

もう、安心だ、と思った。

だって、お父さまの約束が破られるはずなどないのだから。

1

寿桑は楠下国第二の街として知られている。
領主は現国王の伯父であるクライモン公爵――公正無私で知られる人物の治めるこの街は、治安の点では王都をも凌ぐと言われている。
町並みは整然としており、下町は存在するものの、追剝や強盗のたぐいはまずいない。たまにそういった被害が届けられることもあるが、調べが進むうちに、それが余所からの流れ者による仕業だと判明する。
当然ながら、そうした流れ者たちは逮捕され、罰を受けた後に寿桑を追われる。
そして、そうして街を追われた者たちが、再び寿桑に立ち戻ることはない。
皆が心を入れ替えるから――だ。
クライモン公爵が、いかなる罰則を罪人に与えているのかはわからない。
ただ、罪を償った者たちは、以降二度と騒ぎを起こすことはない。

仁治の街――と、いつしかこの街が呼ばれるようになったのは、まさにそのせいであった。

そんな寿桑の北部に位置する一郭に――裕福な貴族や富豪が屋敷を構える地域があった。

北寿桑――選ばれた者しか屋敷を構えることを許されない、またその性質上、出入りするだけでも厳重な調べを受ける、寿桑一、警備の厳しい区域である。

その北寿桑に並ぶ豪邸のなかでも、ひときわ広く、且つ豪奢な屋敷――クライモン伯爵邸のなかを、古参とおぼしき中年の侍女に先導され、歩く青年の姿があった。

どちらかと言えば長身に属する青年だったが、ほっそりした体つきからして、肉体労働に向いているとは、到底思えなかった。

樹翁の文化では、体の線がわかるような衣服を身につけることは――主に女性に対してのことだが――はしたなく、下品なこととされている。

だが、それは男性にも言えることであり、同時にそこには、別の意味の選別の意図が組み込まれている。

安価ではない布をふんだんに用いた衣装は、それだけその人物の経済力を計る目安となるのだ。

無論、その素材も注目される。

青年が身に着けているのは木綿の上下だった。



染めもあまりよくない。
刺繍や飾りにいたってはひとつもない。
粗末とまでは言わないが、お世辞にも上質のものとは言いかねる。
そんな服装の……つまりは階級の青年は、この屋敷においては違和感を醸しだしていた。このクラスの屋敷に出入りするには、彼の格好はいささか分不相応だったのである。
しかも、周囲の注視を浴びる要素を、彼はほかにも抱えていた。
長い、長い栗色の髪がそうだった。
樹翁において、女性は髪を長くのばし、結うのが常識とされている。女性にも拘わらず短髪であることは、それが罪人か、神殿に生涯を捧げた者であるか——どちらかでしかないことを示す。もっとも、神殿に籍を置くすべての女性が、短髪になるわけではないわけだから、罪人と見なされることが多いのだけれど。
だが、それとは別に、男性の場合、ある程度以上の長髪もまた、樹翁では特別視されるのだ。
少なくとも、肩に届く以上に髪をのばしている者については。
それは、特別な聖職にある者か、生涯をかけた願をかけた者——そのいずれかだった。
青年の髪は、腰までも届くほどに長かった。

前述したいずれかの条件に当てはまるものと思われた。
だからこそ、この屋敷に招かれた――と、言えないこともない。
ある部屋の扉の前に来たとき、先導する女性が、こほん、と咳払いした。
「あなたには、お嬢さまへの教育をお願いいたします。お嬢さまは、聡明この上ない御方……あなたの知識を注ぐにふさわしい御方ですから」
そう告げる女性の声音には、ぴりぴりするような緊張感があった。
青年は、かえってその反応が理解できないとばかりに首をかしげた。
しかし、年配の女性は、結局、彼に疑問を口にする機会を与えはしなかった。
扉が迫ったのを幸いとばかりに、彼女は扉をノックしたのだ。
「お嬢さま……お嬢さま？」
応えは、すぐに返ってきた。
「大丈夫よ」
涼やかな少女の声だった。
ほっと息をつき、女は扉の把手に手をかけ、開いた。
まるで、それだけのことが、大変な難関を突破したかのように。
けれど、青年は、いっさい口を挟もうとはしなかった。

まるで、運命そのものを受け入れる殉教者のごとく――。

そして、声の主の姿を目にした瞬間、青年は知らず、祈りの仕種を指で刻んでいた。

それも、無理からぬことだった。

なぜならそのとき、彼の目の前に現れたのは、バルヴァローズを支える女神たちの美質のみを備えた存在――少なくとも、彼の目には、そうとしか見えないものだったのだから――！

年の頃は十五、六といったところか――この上なく美しい少女は、少しだけがっかりした顔で声をかけてきた。

「あなたが、新しい家庭教師の先生……？」

無邪気に問いかける少女の言葉に、青年はこくりとうなずき、「はい」と答えた。

「あなたは、なにを、教えてくださるのかしら？」

少女の口調が、少しだけ意地悪くなった。

けれど、青年の態度は変わらない。

「あなたが、知りたいと思うことの……一部を」

予想外の答えだったのか、少女はまなじりをきつくひそめた。

「すべては教えてもらえないということ？」

「いいえ」

と、彼は返した。
「答えはすでにあなたのなかにある……そういうことです」
少女は首をかしげた。
「わからないわ」
そう、つぶやいた。
しばらく考えこんだ後、やはりわからないとばかりに彼女はかぶりを振ってつぶやいた……。
「やっぱり、わからないわ」
首をかしげる少女の名はウィランシーダ――。
「わかりませんか？」
悲しげに、青年は問いかけた。
「わからないわ」
と、少女は無情に答えた。
「わたしにわかることは、多くはないのよ」

「先生」

呼びかけてくる声は、いまだ幼さの残る少女のそれだった。

「ナウニーロ先生ったらっ」

机を挟んで正面にいる少女が、苛立ちもあらわに彼の目の前にかざした右手をひらひらと振った。

是が非でも、視線を自分に向けさせるつもりなのだろう。

小さく息をついて、ナウニーロは顔を上げた。

実のところ、彼はこの講義中に教えた内容に関する、復習の意味も兼ねた小試験をし、その採点作業中だったのだが、このままでは埒があかないと判断したのだ。

少女――ウィランシーダの露草色の双眸は、期待にきらきらと輝き、意識がそちらへ向いてしまっているのは間違いなかった。採点を終え、講義を再開しようにも、このままでは彼女の実にならないのは目に見えている。

仕方ないと、小さく息を洩らし、ナウニーロは顔をあげた。

「講義に身が入らないほど、お嬢さんの心を独占しているのは、いったいどんなことなのかな？」

そう問いかけた彼に、ウィランシーダはそれは嬉しそうに微笑んだ。
「新しいお友達が来るの！」
「……友達？」
「ええ、そう。名目は遊び相手とか学友ってことになっているのだけど、わたしにはわかっているの。わたしたち、きっといいお友達になれるわ。だって、いままで一度だって、そうなれなかったことはなかったんですもの」
だからね、先生――と、ウィランシーダは声をひそめてささやいてきた。
「一緒に講義を受けることになると思うのだけれど、その子だけ苛めたりしては駄目よ？　大事な、わたしのお友達なんだから」
釘を刺すというには、いささか幼いやり方だったが、ナウニーロは小さく首をかしげた。
「まだ会ったこともないのに、大切な友人だと？」
家庭教師の揶揄を孕んだ問いに、少女はつんとして答えた。
「先生も、なぜそんなことがわかるのかって仰りたいのね、いいえ、別に不思議なことではないわ。これまでだって、先生方は必ず同じことを仰ったんですもの。わたし、そのくらいのことで気を悪くするほど狭量ではありませんわ」
そう言って、彼女は勝ち誇るかのように笑った。

「だって、ねえ、先生？　わたしはそうなることを知っているんですもの。これまで一度だって、彼女たちが大切な友達にならなかったことなどないのよ？　きっと強い縁で結ばれているのだと思うの」

新しい遊び相手――もしくは学友。

ウィランシーダの様子からは、新たな友人が増えて嬉しい――という思いしか読み取れはしない。その事実の奇怪さに、彼女は気づいてはいないのだ。

少なくとも、彼女の態度を見る限り、そうとしか思えない。

普通、そう頻繁に、『遊び相手』、もしくは『学友』と呼ばれる人物が交代することはない。長期間つきあうことで、心の交流を持つことを期待される存在だからだ。

ところが、ウィランシーダは、これまで何度も、そうした存在の交代があったと言っている。

「以前の『お友達』はどうしたのかな？」

問いかけた瞬間、ナウニーロは一瞬ヒヤリとするものを覚えた。

踏みこみすぎたかと思ったのだ。

しかし、それは杞憂にすぎなかったらしい。

ウィランシーダはなんら不審に思った様子もなく、あっさりと答えたのだ。

「帰っちゃったの。お母さまが体調を崩してしまったり、ご兄弟が大怪我なさったり……様子が落ち着き次第、戻って来てくれるよう、約束したんだけれど……」

戻ってきてくれたひとはいないのよね――。

淋しそうに告白して、けれど彼女は強い口調で言い切った。

「でも、きっと、大変な時期を乗り越えたら、きっと、連絡してくれると思うの。絶対よ、きっと！」

2

新しく屋敷に来た『学友』は、ウィランシーダの期待通りの少女だった。

柔らかく波うつ髪は黄金色――アカシアの蜂蜜を思わせるその髪は一本一本、とても細く、しかも柔らかそうだった。

白い肌はバラ色で、少しだけそばかすがあったけれど、健康の証のように見えるから、気にはならなかった。

目を瞠ったのは、その瞳だった。極上の青玉もかくやという、深く澄んだ青――。

なにより一番嬉しかったのは、相手が気さくに笑いかけてくれたことだった。ここ数年というもの、ウィランシーダと初めて会ったひとは、どういうわけかぽかんとした顔になり、しかもぎくしゃくした態度でしか接してくれないことが多かったから、これは本当に嬉しかった。

（いくら慣れてきたら普通につきあってくれるようになるとはいっても、みっともない顔してるんだって、何度も思い知らされるのは、やっぱり楽しくはないもの……）

そう言うと、みんな口を揃えて「とんでもない！」と言うのがわかっているから、口にはしないけれど。

気を遣われるのは、あまり嬉しくはない。心にもないお世辞など、もっての外だ。

いや、たとえそうでなかったとしても――。

（それは、彼らの目に真実が見えていないだけのことなのだもの）

けれど――だからこそと言うべきか、ウィランシーダは美しいものが好きだった。

父親であるクライモン伯爵も、そんな彼女をよく知ってか、綺麗な『学友』や家庭教師を選んでくれる。先日来たナウニーロも、男性離れした美貌の主ではあったけれど、たったひとつ気に入らない部分があったこともあり、彼女は目の前の少女に軍配を上げた。

ウィランシーダは、自分にはない健康的な美しさに惹かれるのだ。

そういう意味において、今回の少女は理想的とさえ言えた。

（春の陽射しの髪、薄紅色のバラのような頬、矢車菊の瞳……なんて素敵なのかしら……？）

春の化身のようだわ、と彼女は思った。

そうして、精一杯みっともなく見えない笑顔を心がけながら、相手の少女に話しかけたのだ。

「今日からよろしくね、わたしはウィランシーダ」

すでに侍女頭のハークナー夫人から紹介され、相手の名前は知っていたけれど、どうしても相手の名乗る声が聞きたくて、わざと一拍おいた。

はたして、同い年だという——つまりは十六歳だということだ——少女は、にっこり笑って口を開いた。

「不束者ですが、誠心誠意お仕えさせていただきます、ウィランシーダさま。わたしのことは、ウォルセイヤか、もしくはセイヤとお呼びください」

セイヤ——と、口のなかで転がして、ウィランシーダは軽く唇を噛んだ。

呼びやすいけれど、ほかにもそう呼ぶひとのいる名前で、目の前の少女のことを呼びたくなかった。

「セーヤ、では……駄目？」

相手が断らないだろうことを見越しながら、問いかけた彼女に、ウォルセイヤは少し驚いた顔になって、けれどすぐにうなずいた。

「セーヤ……なんだか不思議な響きに聞こえますね、綺麗ですけど」

「……そう呼ばれるのは……いや？」

重ねて問われた少女——ウォルセイヤは「いいえ」とかぶりをふった。

「とても綺麗な響きですもの」

「じゃあ、そう呼んで、いい？」
「はい」
と、うなずかれて、ウィランシーダは本当に嬉しくなった。
もちろん、雇われた身の上だから、ウォルセイヤが渋々うなずいたという可能性もわかってはいたけれど、それでも――。
彼女のことを、自分だけの特別な名前で呼べることが嬉しかった。
（もしかしたら、これまでで一番、好きになるかもしれない……）
そう、思った。

クライモン伯爵邸に上がって半月――一人娘であるウィランシーダの侍女兼学友という身分となったウォルセイヤには、どうにも引っかかる疑問があった。
主人である少女のことだ。
思わず目を疑いたくなるぐらいに綺麗な少女だというのに、本人にはその自覚がないどころか、自分のことを『みっともない』容姿の主だと信じこんでいる様子なのだ。

ウィランシーダの髪は金褐色の巻き毛である。細すぎず、柔らかすぎず、とても美しいと思う。

ウィランシーダの瞳は美しい露草色だ。

肌はシミひとつない真っ白で……そこだけは、病弱そうな名残があったけれど、決して『みっともなく』はない。

それどころか、ウィランシーダ以上に美しい少女など、ウォルセイヤはこれまでたったひとりしか見たことがない。

「なのに、変なんですよねえ……あんなにお綺麗なのに、ウィランシーダさまったら、御自分のこと、みっともないって信じてらっしゃるんですもの」

そりゃあ、幼いころは病弱でらして、かなり痩せてらしたって話ですけど——。

ふうう、とため息まじりにグチをこぼす相手は、同じ新参者の家庭教師——ナウニーロだった。

いくら主人であるウィランシーダに親切にしてもらっても、慣れない屋敷での生活の気疲れは出る。

どうにも眠れない夜、こっそり庭に散策に出た折り、同じ理由で植木の陰でぼんやりと夜空を見上げていた青年と鉢合わせして以来、ささやかな愚痴友達として、ふたりの交遊はつづい

ていた。

本来ならば、人目のない場所で、未婚の男女が親しく語り合うなど、言語道断のことだったが、ナウニーロは生涯独身の誓いをたてている身だったから、ウォルセイヤも気安く相談できるのだ。

「確かに、このお屋敷は妙と言えば妙だよね」

明日の講義の準備なのか——帳面にペンをすらすらと走らせながら、ナウニーロがうなずく。

「妙なんてものじゃありませんってば！」

もっと親身になって聞いてほしくなって、ウォルセイヤは力一杯こぶしを握りしめた。

「変ですよ、ここ！　普通、あんな勘違いした……しかも年頃の御令嬢の誤解とか、さっさと解きたいとか思いませんか!?　なのに、他の誰に聞いても、ちゃんと答えてくれないんですよ!?　おまけに……おまけに、このお屋敷ってば、変だし……」

「変……？」

わずかに目線を動かすことで、疑問を少女に伝えた青年に対し、ウォルセイヤはこくりとうなずいた。

「ええ。どう考えても変だと思うの。だって、このお屋敷には、一枚も鏡がないんですもの！

それって、おかしくありません!?」

思案顔になったナウニーロの様子には気づかぬまま、少女は憤慨もあらわに叫んだ。

「ウィランシーダさまのあの妙な勘違いも、きっとそのせいだと思うの。ご自分のいまの顔をご覧になったら、いくらなんでも、あんな見当違いの思いこみはなさらないと思うんです。いっそ、今度のお休みに、街で手鏡でも買って来ようかしら?」

そうしたら、きっと、ウィランシーダさまの勘違いも解けるだろうし……と、つぶやいた少女に、やんわりと制止の声をかけたのはナウニーロだった。

「それは、やめたほうがいいだろうね」

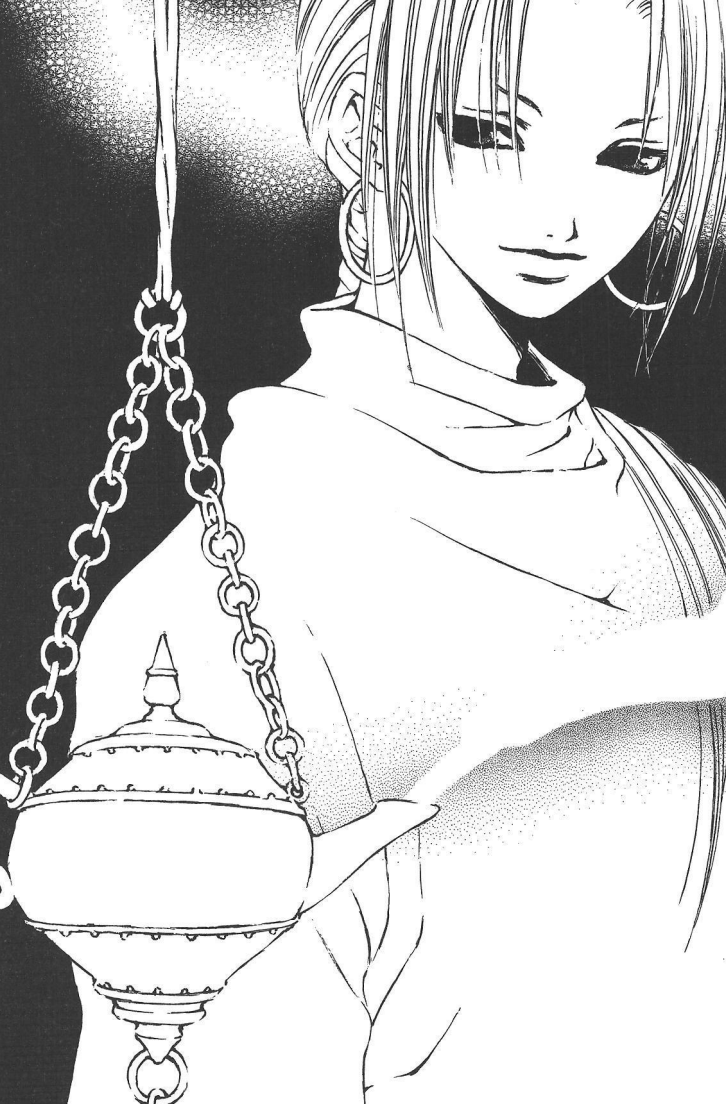
きつい口調ではなかったというのに、なぜか強い力を感じ、ウォルセイヤが目を大きく瞠った。

「先生?」

それはいったいどういう理由なのか——と、つづけて問いかけようとした彼女は、けれどその問いを口にすることができなかった。

ナウニーロの全身から、これまで感じたことのない、不思議な空気が流れ出ているように感じたのだ。

それに触れたとたん、ウォルセイヤは肌がひりひりと痛む錯覚を覚えた。



見えない手が伸びてきて、心臓を鷲摑みにするような――恐怖に襲われたというのが一番近い感覚だろうか。

「……先生……？」

呼びかける瞳に怯えが走る。

しかし、青年はそんな少女の様子には気づかぬ風に微笑んだ。

「ひとは見たくないものからは目を背けることが多いからね」

ますますわけがわからない。

思わず首をかしげたウォルセイヤに、ナウニーロは「気にすることはありませんよ」と言った。

とてもうなずけないことだった。

3

「セーヤはいいわね……」
ぽつりと、ウィランシーダが洩らしたのは、ウォルセイヤが初めての休日を過ごした翌日のことだった。
ウォルセイヤには意味がわからない。
「え……？　いい、って……？」
きょとんとして問い返すと、自覚のない美少女は、苦笑まじりに肩をすくめた。
「街に出かけることができて、羨ましいという話。わたしは……ここから出られないから……」
動かしようのない事実に対する嘆きとも諦めともつかない主の口調に、ウォルセイヤは軽く目を瞠った。
「出られないって……それはお父君の……伯爵さまのご命令で……？」

彼女がそう思ったのも無理はなかった。

なぜなら、ウィランシーダの父親であるクライモン伯爵は、この街――寿桑を支配するクライモン公爵の長男にして跡継ぎと見なされている人物なのだから。

貴人や権力者――あるいはそれに連なるひとびとには、危険がつきまとう。

誘拐や暗殺の可能性を、常に胸に刻みこんでいなければならないのだ。

ウィランシーダの場合、その可能性は非常に高い。

なにしろ、この楠下の王位継承権保持者の末席に名を連ねているばかりか、その父や祖父は、さらに高位の継承権を持つ人物なのだから。

確か現国王にはふたりの王子とひとりの王女がいるはずだが、それに次ぐのはクライモン公爵のはずだった。公爵の嫡出子は伯爵のほかにふたりほどいるが、それでもウィランシーダの継承権は、十位以内とされているはずだ。

（多分、八位……ぐらいかしら？　公爵さまが四位で、伯爵さまが五位ってことを考えたら、あんまり王座に近いとは思えないけれど……でも、きっと王家に対してよからぬことを考えているひとたちにとっては絶好の的だったりするわけよね……）

なんだか、ウィランシーダのことがとても気の毒だった。

「確かに、寿桑は治安のいい街だってことで知られてるみたいですけど、不心得者が皆無って

わけじゃなさそうですものね。ウィランシーダさまを狙う輩がいないとは限りませんし……ね」

いい家に生まれるのも、ある意味大変なんだなあ――などと、呑気なことを考えつつ、そうつぶやいたウォルセイヤは、しかし、びっくりしたような主人の視線を受けることになった。

「セーヤ……」

かすれた声で名前を呼ばれ、ウォルセイヤはわけがわからず首をかしげた。

「はい？」

後で振り返ったとき、ずいぶん間抜けな声をあげたものだと恥じ入ることになったのだが、このときはもちろん、そんなことには気が回らなかった。

「あなた、どうして、そんな風に考えたの？」

どうして――と問われても、答えられなかった。

あまりにも自然に……すんなりと、それは出てきたのだ。

「え？　え？　変ですか!?」

「変よ」

きっぱりはっきりと言い切られて、ウォルセイヤは途方に暮れた。

「普通、わたしの健康状態のせいだとみんな、思うわよ？　見ての通り、わたしはこんな状況

だし……大体、王位継承権とかそういうことって、あまり広くは知られていないはずなんだけれど……？」

探るような目を向けられ、ウォルセイヤは心底困った。

健康上の――という、ウィランシーダの疑問には、本人が思っているほど病弱には見えないから、としか答えようがない……が。

本人が、病気のせいでがりがりに痩せてみっともない姿をしている、と信じこんでいるのは明らかだから、説得できるかどうかは謎だった。

そして、もうひとつの疑問については――。

（ええっと……なんで、そんなこと、知ってるんだっけ……!?）

一所懸命、記憶を探った。

霞がかかったように、うまく思い出せない。

ただ、誰かに教えてもらったことだけはわかったから、うんうんと唸りながら、彼女はそれを教えてくれたひとのことを思い出そうと努力した。

そうして、ポン、と手を打った。

「神官さまです！　わたし、読み書きを教えてもらうために、神殿に通ってたことがあったんです。そこの神官さまがちょっと変なひとで、いろんな国の成り立ちとか、いまの状況とか話

してくださったんです。楠下の建国伝説とか、五十年前の王朝交代劇とか……母さんなんかは、そんな役にも立たない話を聞くぐらいなら、家の手伝いのひとつもしてくれたほうがありがたい……なんて、言ってましたけど」

そんなに変なことばっかりなんでしょうか――？

悄然として尋ねたウォルセイヤに、ウィランシーダはほっと息をついて「そんなことはないわ」と告げた。

「ただ……驚いたわ。セーヤは、これまでうちに来てくれた友達の誰よりも、物事に通じているのね」

「通じて……いるんですか？」

半信半疑で問い返した彼女に、主たる少女は、くすくす笑いながらうなずき、ぎゅっと抱きしめてきた。

「あ、あの、ウィランシーダさま……？」

「大好きよ」

と、露草色の瞳の少女がささやいた。

「本当に、大好き」

そして、意味不明な言葉を口にした。

「あなたなら……許せるかもしれないわ」

何を言われているのかわからず、首をかしげたウォルセイヤに、念を押すようにウィランシーダはささやいた。

「忘れないで。覚えておいて。大好きなセーヤ……あなたになら、もしかしたら、許せるかもしれない……」

何を言われているのか、本当にわからなかった。

「ウィランシーダさま……？」

問いかけるように、主人の瞳を見つめ返して――そのとき彼女は侍女頭であるハークナー夫人から受けた説明の意味を理解した。

『お嬢さまは、ときおり、常人とは違う世界の事象に係われることがあります』

夫人は、こうも言った。

『次に目覚められたとき、お嬢さまはそのときのことをほとんど覚えてらっしゃいません。ですから、わたくしたちは、お嬢さまに余計な負担をおかけしないためにも、そのようなことはなかったのだと認識せねばなりません』

聞いたときには、そんな馬鹿な、と思った。

けれど今では……否定できない。

神がかった……まるで巫女のような様子になったウィランシーダから、感じ取れるのはひどく歪んだ意志だった。
禍々しいわけではない。
けれど、長いこと触れているのには耐えがたい——なにがしかの空気。
「ウィランシーダさま……？」
呼びかける——いつもの彼女に戻ってくれるよう、祈りさえこめて。
「ウィランシーダさま！」
主人である少女の表情が凍りついたのは次の瞬間だった。
ゼンマイ仕掛けのからくり人形が止まるように——唐突にあらゆる動きを止めた少女は、数瞬の間を置いて、瞬きした。
「……セーヤ？」
きょとんとして、ウォルセイヤを見返してくるその眼差し——。
紛れもなく、それはウィランシーダのものだった。
その事実にほっと安堵する一方で、不安が大きく育っていくのをウォルセイヤは認めざるを得なかった。
なにかが、おかしい。

それとも、なにもかもがおかしいのか。
（どうしよう……怖い）
得体の知れぬナウニーロが怖い。
ウィランシーダを時折支配する『何か』が怖い。
その存在を認識しながら看過しているこの屋敷のあり方が怖い。
怖い、怖い、怖い――。
逃げ出したい、とさえ思った。
けれど、それはできなかった。
枷となったのは、ウィランシーダの存在だった。
（あのひとをこのまま放り出してはおけない……）
強く、強く、ウォルセイヤはそう思った。
理屈ではなかった。
それは勘にすぎないけれど、しかし確信でもあった。
ウィランシーダの周囲に、彼女にとってはよくない影がかかっている。
（なんとか、しなければ……）
けれど、実際のところ、どうしていいのかわからない。

頭を捻りに捻って、出した答えは消極的なもので、けれどしないよりはましに思えたので、彼女はウィランシーダに訴えた。

「わたし、ナウニーロ先生って、なんだか怖くて……苦手です」

彼のことが嫌いなわけではなかった。

ただ、いつか彼から感じた得体の知れなさを忘れることができない。

彼がそばにいることで、ウィランシーダが歪んだなにかに引き寄せられることになったら……そう思うと、言わずにはいられなかったのだ。

……数日後、ナウニーロはウィランシーダの家庭教師の職を解かれた。

薄暗く、狭く切り取られたかのような空間で、男は小さな窓を見上げた。

鉄格子に覆われたその窓は、自由への可能性すら示さぬもので……しかし、そこから射し込む陽光だけが、男の意識を繋ぎとめていた。

「いっそ……」

男はそこに入れられて以来、何度つぶやいたかもしれない言葉を口にする。

「いっそ、一思いに……」

殺してくれと、男はつぶやく。

だが、それはかなわない。男の命はすでに男の手から離れていた。

それを握る相手は、決して男の声に耳を貸さない。

その人物にとって、彼はひとではないからだ。

物――あるいは材料。そう見なされていることに、男が気づいたのは、この牢獄に閉じこめられて、五日ほどが経過したころのことだった。

怪我したとき、出血と同時に感じる脱力感――それと似た感覚を覚え、確信したのだ。

なにかに、命を啜られている。

恐らくは死ぬまで、その感覚はつきまとうのだ。

そうと認識したとき、男は全身の肌が粟立つような嫌悪感に見舞われた。

ろくな人生ではなかった。生きるために盗みもした。ひとを傷つけも、殺したことさえあった。

捕まれば縛り首まちがいなしの賞金首になったことを知ったときも、さしたる感慨はなかった。

要は役人をうまくかわせばいいのだと思った。

実際、うまくかわしつづけてきたのだ。

つまらない喧嘩で捕まったときも（らしくもないヘマをやったもんだ）とは思ったが、絶体絶命の危地に追い詰められたとは思わなかった。

自分の素性が知られぬ限り、下っぱの役人など、鼻薬ひとつでどうとでもできると高をくくっていたのだ。

事実、この街――寿桑以外ではそれが成立していた。どうして、この街でだけ、そんな『約束事』が通用しないなどとわかるだろう!?

「ちくしょう」

つぶやいたつもりの声は、すでに声にならなかった。

ちくしょう、ちくしょう、ちくしょう――！

唯一の外界との接点である――牢の高窓を見上げながら、男は脳裏に罵倒の言葉の限りを並べた。

そうすることが、男に出来る精一杯の抵抗だった。

刻一刻と命を奪われ、あとは死ぬしかない男にできることは、自らの命を啜る相手への呪詛のみだった。

「殺してやる……絶対に、なんとしても殺してやる……！」

そうつぶやくと同時に、男は息絶えた。
魂そのものを呪詛に用いた、強烈すぎる呪いだった。
だが、その呪いが実際に効果を顕すことはなかった。
彼の命を奪った者は、呪詛を打ち消す力を備えていたのだから。
いや、正確に言うなら、その方向性をねじ曲げる力、か。
だから、彼の呪いは成就しない。
彼の死は、ただ利用されるだけなのだ。

寿桑の街を、呑気な面持ちで闊歩する青年がいた。
その髪は輝く黄金――双眸は深い、深い青。
肌が褐色でさえなかったら、誰も彼が異邦人であることに気づかなかったに違いない。
あまり上質とは言い難い上下に身を包んだ青年は、いくつかの飲食店を経由した後、ある店に入った。
長年の相棒との待ち合わせ場所だった。

扉をくぐるなり、おどろおどろした重苦しい気配に気づかされた。
本来、そういうものに鈍感にできている彼ではあったが、さすがに十年以上組んだ相棒の気配には敏感にならざるを得ない。
（うわー、機嫌悪そう……）
そうは思ったものの、素直に口に出したりはしない。
機嫌を損ねた相棒ほど、恐ろしくも厄介な存在はないと学習しているせいだ。
「待たせちゃった……かな？」
だとしたら、御免、許して――との、言外の意味をたっぷり含ませての青年の言葉に、相棒である相手は、にこにこ笑いながら「いいえ」と答えた。
非常に、とても、恐ろしい笑顔だった。
（なんだっておれは、こんな物騒なやつと組んで仕事してるんだろう？）
一瞬湧き上がった後悔の念は、しかし次の瞬間、相棒の青年の浮かべた笑みで帳消しになった。
魂に誓って、男色の気などかけらもないと言い切れる青年――トリノアークだったが、いかなる運命の悪戯か、彼の理想とする顔は、なぜだか、よりにもよって、彼の相棒のそれだったりした。

（ああ、この顔で体が女だったら、速攻で口説き落とすのに……）

そう思うのだが、現実は厳しい。

なにしろ相棒は正真正銘の男性であり、しかもその実力のほどに関しては、充分すぎるほどの満足感と信頼感を抱いているからだ。

「非っっ常に機嫌悪そうに見えるんだけど……もしかして、収穫ゼロだった、とか……？」

尋ねたトリノアークに、相棒である青年――ナウルニール――はかぶりをふった。

「そういうことじゃありません」

一息に言い切り、彼はため息をついた。

「そうじゃ、ないです」

では、どういうことなのか――。

尋ねて、答えをもらったトリノアークは「聞くんじゃなかった」とつぶやいた。

後味の悪い仕事になりそうな……イヤな予感がした。

4

「セーヤ！」

その日、露草色の双眸を、嬉しそうにきらきらと輝かせながら、部屋に飛び込んできたウィランシーダを目にしたとたん、どうして胸がどくん、と大きく脈打ったのか、セーヤ――ウォルセイヤにはわからなかった。

ウィランシーダは今日も美しかった。

興奮しているせいか、いつもより顔色がよく、そのせいか、二割増、健康そうにも見えた。あまり健康的に見えないことが、唯一の欠点と言って差し支えない、完璧な容姿を誇る彼女のことだ――その日、そのときの彼女はまさに完璧にして非の打ち所のない美の化身だった。

ウォルセイヤがこの屋敷に上がって早二月――いいかげん、『学友』という名の主家の令嬢の美貌には見慣れたつもりになっていたのだが、この日のウィランシーダは特別だった。

（なんて……なんで、こんな美しいひとがこの世に存在するんだろう……？）

そんなことを思いながら、ついうっとりと、その笑顔に、その姿に、見とれていたウォルセイヤに、露草色の瞳を持つ少女は笑いかけてきた。

「セーヤ！　なにをぼんやりしているの!?　ほら見て、セーヤのために頼んでいた『お守り石』が、ようやく届いたのよ？」

そう言いながら、ウィランシーダが嬉しそうに、どことなく自慢げに、後ろ手に隠していた包みを取り出し、広げて見せるのを、ウォルセイヤはなんとなくぼんやりと見つめていた。

なにを言われているのか、わからなかったというわけではない。

お守り石とは、このバルヴァローズを支える神々に選ばれた、『聖石の使徒』さまが生み出す、とても強い守護の力をたたえた石のことだ。

その石が何であるかで、値段はずいぶん違うけれど、それでも決して安価なものではない……はずだった。もちろん、この楠下でも有力なクライモン公爵家の一族であれば、いくらだって手に入れることはできるだろうが……それでも、使用人に過ぎない自分のために用意するというのは、ちょっと、奮発しすぎなのではないだろうか？

それとも、以前は病弱だったというウィランシーダのそばにいる者に、間違っても彼女にとって悪しきモノを近づけさせないための備えなのだろうか……。

なんとなく、それはあり得そうなことに思えた。

口の固いハークナー夫人はともかく、噂話が嫌いではない、ほかのひとたちの話によれば、幼いころ病弱だったウィランシーダは、恐らく十まで生きられまいと言われていたそうなのだから。

現在のウィランシーダの姿を見れば、そんなものは医師の誤診だとしか思えないのだけれど、彼女の肉親としては、そう簡単には忘れられないのかもしれない。事実、彼女の母親であるひとは、出産によって若い命を散らせているのだから。

（だから、使用人に過ぎないわたしにまで、そこまで気を配ってくださるんだわ）

ありがたいことだと思った。

神殿の祝福を受けた『お守り石』など、ウォルセイヤにとっては高嶺の花もいいところなのだ。

（なんて、慈悲深い御方なんだろう……）

たとえそれが、ウィランシーダのためだと言っても、責めたり評価を下げる材料にはなりえない。

石を買えない階級には階級なりに、呪いの方法がないわけではないのだから。

（本当に……わたしはなんて、幸せなのかしら）

そう思いながら、どんな『お守り石』をもらえたのか、少しだけどきどきしながら、ウィラ

ンシーダの指の動きを目で追っていたウォルセイヤは――しかし。
それを目の当たりにした瞬間、声もなく倒れてしまった。
彼女のためにしつらえられた守り石は、大粒の透明な水晶――。
首に下げるようにつけられた鎖は金。
「セーヤ!? どうしたの、セーヤ!?」
必死に呼びかけてくるウィランシーダの声を遠くに聞きながら――ウォルセイヤは答えることができなかった。

上質の絹の長衣に身を包んだ女性が、薄暗い部屋の中――椅子に腰を下ろしていた。
窓がないわけではない。ただその部屋の窓には、遮光性の高い生地で作られた覆い布がかけられているのだ。
頼りない蠟燭の炎の照らす室内で、女性は手の中のものに目を落としている。
粗末で頑強そうな……それは鉄の腕輪だった。
いや、枷と呼んだほうがふさわしいかもしれない。なにしろ装飾品らしい細工など、ほとん



どほどこされてはいない品なのだから。

だが、それをただの枷と呼べない理由も存在していた。

その鉄の輪には、貴石とおぼしき石が嵌めこまれていたのだ。ただし、それがいかなる種類のものなのか、判断することはできない。

なぜなら、石は真っ白く濁り、表面には亀裂さえはしってしまっていたのだから。

聖石――あるいはその子供石に関わりを持つ者が、その石を目にしたならば、すぐに息を飲んだに違いない。

石が白濁するということは、それが強大な瘴気に触れた証なのだから。

強すぎる瘴気のせいで、石自体が持つ力を使い果たし、疲弊したということなのだから。

だが、その白濁した石は、『脱け殻』ではなかった。

異常なまでの力が、その石には宿っていた。

しかし、それは歪に捩じれた力だった。

長衣の女性は、その石にそっと指をのばしかけたが、触れるかどうかというところで、はっとして引いた。

そんな女性に、苛立たしげな声がかけられたのは次の刹那のことだった。

「なにをしている？　初めてというわけでもなかろうに、まだぐだぐだと思い悩んでいるの

か？」

問いかけてくる声は低い――年配の男性のものだった。

長衣の女性がかぶりを振る。

「いいえ、本当にいまさらなのですもの。それに……」

「そう」

と、彼女の言葉を引き取るように、男がつづけた。

「そもそも最初にこの方法を持ちかけてきたのはそなただ。あれを永らえさせるための力を、余所からかすめ取ればいいのだと……言い出したのはそなたなのだからな」

わざわざ思い知らせるような、残酷な響きを宿すその声、その言葉に、女性は力なくかぶりを振った。

「わかっております。ですが……」

縋るような目をして、女性は声の主を振り返った。

彼女の背後で、その男性は真紅の葡萄酒を口に運んでいた。

「気にすることはない。どうせ生きている価値などない屑どもだ」

その瞳に宿る光は昏い。

彼が真実そう信じているのか、それとも無理やりそう思おうとしているのか――表情から読

み取ることはできない。

「この輪をつけた者たちはそうでしょう……そういう者を選んでいるのですから。けれど……」

「詮ないことだ。濾紙はどうしても必要なのだからな。そなたとて知っていようが。濾紙なしに注ぎこんだ結果、あれがどんなことになったか――」

長衣の女性は、思わず俯いた。

言われるまでもなく、あのときの様子は脳裏に刻みこまれていた。

強すぎる薬が、時に毒にも等しく作用するように、彼女と男が宝のように思っている存在は酷い発作を起こしたのだ。

そそぎこまれた『力』を、その人物の肉体……いや、存在そのものが、異物と見なし、拒絶したのだ。

それゆえに男は、もうひとつ、手間をかけることにした。

すなわち、不純物を取り除き、その人物が異物と認識しない『もの』へと変えるための……

そう、彼のいうところの『濾紙』を用意したのだ。

男の目の付けどころは正しかった。

濾紙を通すことによって、拒絶反応はなくなった。

だが、それと引き換えに――。

「いまさら、思い悩んだところでなんになるというのだ？」

穏やかに告げられ、彼女は唇を噛みしめた。

そう……そうだ。もはや、男を断罪する権利など、自分にはないのだ。

同じ目的のために、この身もまた、罪に身を浸してしまったのだから。

（ああ、けれど……）

脳裏に浮かぶのは、彼女の宝――そろそろ幼さを脱ぎ捨てつつある……愛しい者。

（すべてを……いいえ、かけらなりとも、知ってしまったら、あの子はどうなってしまうのか……）

自らの命が、数多の犠牲の上に成り立っていることを。

（もしも、そんなことになったら……）

考えたくもないことだったが、考えないわけにはいかなかった。

彼女は、共犯者である男ほど、事態を楽観的には見なせなかったのだから。

子供は成長するものだと、身をもって知るがゆえの焦燥だろうか。

それとも――。

真の断罪者の存在を、実存を知るがゆえの恐怖なのか。

（わたくしは、どうすればいいのだろう……）

目を瞑り、彼女――クランディーイ……水晶の使徒である女性は考えた。

愛しい、大切な、たったひとりの妹の忘れ形見のために――。

寿桑――楠下第二の街として知られる街の宿屋の一室で、一見して異邦人であるとわかる青年ふたりが、真剣な面持ちで向かい合っていた。

ひとりは純白の髪と鳩の血色の瞳を持つ青年、もうひとりは褐色の肌に矢車菊の瞳を持つ青年――どちらも、この地方では珍しい色彩の人物だった。

それもそのはず、彼らはこの国――楠下の出身ではない。

さらに言えば、祖国にあっても、「珍しい取り合わせ」だと言われた者たちだった。

いかにこの地方の衣服を身に着けようが、違和感を醸しだしてしまうのは、いかんともしがたい。

が、このふたり、幼少時から注目を浴びるのには慣れているため、大して気にも止めていない。

おおらかと言うか、大雑把というか……まあ、そういう性格の主だったりするのだ。
それで、そんな彼らが何者なのかといえば――。
「また、出たそうです」
苦い顔をして、真紅の双眸の青年が、懐から取り出したものを、テーブルの上に置いた。
もうひとりの青年が、くしゃりと顔を顰める。
「あー、もう、駄目だって。おれがそういうの、なーんもわかんないの、知ってるはずだろう？」
だから、そんなの、出すだけ無駄――とでも言わんばかりに、剣を扱い慣れた大きな無骨な手をひらひらと振る。
「そんなの、わたしだって一緒です」
不機嫌な面持ちで、真紅の瞳の青年――ナウルニールが答える。
「威張って言うようなことか？」
呆れたように肩をすくめたのは褐色の肌の青年――トリノアークだった。
「威張ってなんかいませんよ」
平然とそう言い切り、彼はもう一度、取り出したものに目を落とした。
「ただ、この石が普通ではないことは、あなたも聞いていたはずだと思いますが？」

ちらりと相棒を見やる目には「まさか聞いてなかったわけはありませんよね」とでも言いたげな光が浮かんでいた。

なかなか剣呑な雰囲気に、ふざけている場合ではないと思ったのか、トリノアークは真面目にうなずいた。

「聞いてたさ。だが、正直なところ、どこがどう異常なのかよくわからなくてなあ」

のほほんとそう告げる青年に、ナウルニールは大きなため息をついた。

「あなたというひとは……」

力なく、幾度かかぶりをふった後、彼は説明を始めた——改めて、事態の異常さを噛みしめながら。

白濁した石には、なにひとつとして気配が残っていなかったのだ。

そんなことは、聞いたこともなかった。

寿桑に生じた奇妙な歪み——。

それに気づいた最寄りの神殿が派遣した聖石の使徒が持ち帰った証拠は、あまりにも異質な

ものだった。

歪みと瘴気は似たようなものだと認識されているが、実のところは違う。

似て非なるものなのだ。

その最たるものが、『力』の有無である。

瘴気には力が宿る。普通ではあり得ぬ事象、現象が生じるのは、瘴気に宿る力ゆえのことなのだ。

たとえば、年をとらない子供――たとえば、人間の目に映らぬ場所。

時の流れを異にする空間を生み出したり、常ならぬ力の行使を可能とする原動力――そして同時にその『理』から外れたがゆえに内包する歪みをより大きく育てていく……それが瘴気と呼ばれるものだ。

対して、歪みは歪みでしかない。空間、もしくは大地のたたえる『気』が、歪な形を取る。

それはもちろん、健常な状態ではないが、それは単に存在しているものとして――少なくとも神殿の関係者には――認識される。

事実、『歪み』を抱えた土地なら、世界中にいくつも存在する。

だが、そのような土地に、神殿が手を入れることはない。

神々の御技――をどうこうできる力など人間は持たないからだ。さらには、そういった土地

の歪みは、大きく育つということをしない。

だから、人間は手出しをしない。できないし、ある意味する必要なしと見なすのだ。いや、人間には計り知れぬ神々の領分に徒に踏みいることを自戒しているのかもしれない。

寿桑の歪みがそうであったなら、神殿も静観することを選んだかもしれない。

だが、寿桑の場合は、話が根本的に違っていた。

瘴気ではない——寿桑に生じたのは紛れもない歪みだった。

何人もの、感査能力に長けた使徒たちが調査し、結論づけたことだ、間違いとは思い難い。

前代未聞のことだった。

歪みを内包する土地が、突如として出現する——それだけで、前例のないことだった。しかもその歪みは調査を重ねる毎に大きく育っているのがわかるのだ。

創世期に生じた歪みではあり得ない。

では、この歪みは何であるのか……？

神殿の中枢部が下した結論は、それは『瘴気』である、ということだった。

ただし、そこに宿る力が使い果たされた——脱け殻同然の瘴気。

だから、歪みにしか見えないのだ、と。

なんのために瘴気が生まれたのか——その原因を、神殿は突き止めねばならなかった。どう



すれば、これ以上歪みを育てずにすむかを、彼らは模索しなければならなかった。

そして。

誰であれば、終止符を打てるかを、彼らは選択しなければならなかった。

選ばれたのは、ふたりの聖石の使徒だった。

紅玉と青玉の使徒――トリノアークとナウルニール。

だが、それだけでは足りなかった。

なぜなら、彼らには致命的な弱点があったからだ。

紅玉と青玉――ともに鋼玉と呼ばれ、金剛石を除けば恐らく、最硬にして最強の力を持つ聖石の加護を受けるふたりは……よりにもよって、ふたりとも。

感受性という点において、まったくといっていいほどに、適性を持たなかったのだ。

「これじゃあ、宝の持ち腐れってやつだ」

遠慮を知らない昔なじみの女性が洩らした一言は、いま、この状況にあっては正鵠そのものだったりする。

現に、ふたりは深い、深いため息を、洩らしながら視線を宙に泳がせていた。

「しっかし、おまえまで弾かれるとは思わなかったからなあ……」

「わたしだって、まさかこんなことになるとは思ってもいませんでしたよ」

縁側で愚痴を洩らしあう老人さながら、額をつきあわせ、ため息の嵐を大量生産しあうふたりは、揃って息をついた。

5

ウィランシーダが体調を崩したのは、春から夏へと季節が移り変わるころだった。

もともと顔色はよくなかったが、白い肌は青白く変わり、それなりにまろやかだった体は見る間にやせ細っていった。

医師の見立てでは、季節の変わり目における体調不良ということだったが、間近に見ていたウォルセイヤには、とてもそうは思えなかった。

衰弱が、激しすぎる。もともとが病弱だったとはいえ、この状況は尋常ではない——異常すぎる。

「ウィランシーダさま、ウィランシーダさま、しっかりなさってください」

床につくことが多くなった主人の枕元で、彼女は一所懸命励ましの声をかけた。

その首もとには、ウィランシーダからもらった水晶の守り石の首飾りがある。

最初に貰ったものと別物であることは、ウィランシーダとウォルセイヤだけの秘密だ。触れ

た瞬間に、得体の知れない衝撃を受けて意識を失ったウォルセイヤのために、主人である少女は、わざわざ別の、そっくりの品を用意してくれたのだ。

多分、相性がよくなかったのだろうから――そう言って。

そうして新たにもらった石には、不快感を覚えることもなかったため、ウォルセイヤはいまもそれを身につけている。

だが、だからこそ、ウォルセイヤには気になって仕方ないことがあった。

あの首飾りのことだ。

ウィランシーダが取り替えてくれたあの首飾りのあの細工――それは、彼女がそれまで身につけていたものと寸分違わぬものに思えるのだ。もしかしたら、ウィランシーダは自分の持っていた守り石と交換したのではないのか――。

だとしたら、彼女がいま体調を崩しているのは、そのせいなのではないのか。

考えるだけで、不安に胸が押しつぶされそうになる。

あの、イヤな気配を放っていた石――あれをもし、ウィランシーダが代わりに身に着けて……それが原因で、彼女が不調を訴えるようになったのだとしたら……？

（そうよ……大体、いくら裕福な家柄だと言っても、あんな大きな聖石の子供石、そう簡単にいくつも手に入れるなんて、無理ではないかもしれないけれど、敢えてする必要なんかないは

ずだわ。それに……あの、見事な細工……）

メッキなどではない、本物の金の細工――。

名の知れた職人の手による細工だとわかる精巧なあの作り――どう考えても、手軽に代わりを見つけられるものではない。

だとしたら……それは、なにを意味するというのか。

いや、もっと大切なことがあった。

（あの、石。あのイヤな感じのする石を身に着けてらっしゃったから……ウィランシーダさまのお加減が悪くなった……？）

だとしたら、なんとしてもあの石をウィランシーダから遠ざけなければならない――強く、そう思った。

脳裏の片隅で、では、あのままあの石を、自分が身に着けつづけていたらどうなったろう――という思いはよぎったけれど、ウォルセイヤはかぶりをふってその考えを払いのけた。

あくまでそれは偶然だと信じていたし、たとえそうでなかったとしても……たとえなにがしかの企みが隠されていたのだとしても、ウィランシーダは無関係だと思ったからだ。

（そう……ウィランシーダさまには関係ない……）

けれど、放置してもいられない。

あの石のせいだという自分の直感が正しいのであれば、あれはいまこの時も、ウィランシーダの命を脅かしているに違いないのだから！

だから、そっと――本当にそっと、声をかけた。

「ウィランシーダさま。あたしのと取り替えてくださったお守り石の首飾りはどこです、どこにあります？」

と――。

そうしてウォルセイヤは再び守り石の首飾りを取り替えた。

久しぶりに触れた石からは、以前以上に禍々しい気配が漂っており、到底身につけることはできなかったけれど――。

「なぜ、こんなことに……」

女――水晶の使徒にして寿桑のアスカニーリ神殿第二の地位にある神官……クランディーイは呻きを洩らした。

自分の行為に迷いを覚えていたのは事実だ。罪深いことをしている自覚もあった。

だが、それでもやめようと思わなかったのは、かかっているのが自らの命ではなかったからだ。自分さえ罪を被れば、大切な者を救うことができると思っていたからだ。

「だのに、なぜ……こんなことに……」

どうにも理由がわからなかった。

状況は一応の安定を見せていたはずだった。搾取された『罪人』たちの命……生気は、適正な濾紙を通ることで、大切な子供のなかに流れこむはずだった。

そのために、聖石の子供石を用いたのだ。

罪人たちが身に着けた石には、その生気を最後の一滴までも搾り尽くすよう条件づけていた。大切な子供に足りないのはそれであり、彼女を永らえさせるために、彼らの命を利用することに関して、罪悪感を覚えたことはなかった。

だが、あくまで他人にすぎない人物の生気をそのまま注ぎこむことはできなかった。なぜかは知らないが、そうすると子供はひどい拒絶反応を示したのだ。

だから、それを円滑に行うために、濾紙となる存在を求めた。

あの子供に馴染むように、生気をこなれさせるための……そのためだけの存在を。

それが、罪人たちで事足りたなら、クランディーイも迷いはしなかったろう。だが、それはかなわなかった。

なにより、濾紙となり得る人物は、問題の子供のそばにいる必要があった。罪人に、そんなことを許せるはずがない。

だから、より深い罪と承知で、クランディーイたちは、罪なき者を損なう覚悟を決めたのだ。いかに健康な者であろうと、絶えず他者の生気を透過させていて、無事にすむはずがないのだから。

持って一年――短ければ半年。

使い捨ての駒として、これまで何人の少女の命を散らせてきたことか――！

けれど、それでもやめることはできない。彼女たちの犠牲なくして、大切なあの子供――妹の忘れ形見の命をつなげることはできないのだから。

そう、覚悟を決めたはずだというのに――。

この事態は、一体なにを示しているというのだろう!?

「透過……しない、だなんて……」

最初は、濾紙の少女が、与えた『守り石』を身に着けていないせいではないかと考えた。

だが、そうではないことは、協力者の女性の報告でわかっている。クランディーイと亡き妹の乳兄弟でもある女性は、それこそ目に入れても痛くないほどにウィランシーダを大切に思っており、彼女たちを決して裏切らない共犯者なのだから。

彼女は、問題の少女が、常に守り石を身につけているかどうかに目を光らせているはずだった。

だから、その可能性はない。

だが、だとしたら……一体、どういうことになるのか。

「まさか、特異な体質の持ち主だとでも……？」

確率は低いが、あり得ない話ではなかった。

そうでなければ、ほかに考えられる可能性は――。

それ、に思い当たった瞬間、クランディーイはぶるりと肩を震わせた。

「あり得ない……」

つぶやく声は、不安に掠れていた。

(そう、あり得ない。もしそうなら、わたくしの耳に入って来ないはずがないのだから……。そのために、わたくしはこの地位を望んだのだから)

そう自らに言い聞かせようとしたが、一度覚えた不安はなかなか消えてはくれなかった。

きり、と唇を噛みしめ、クランディーイはひとつの決意を固めた。

愛しい、不憫な姪のために――もはやただひとり残された、同じ血を引く者のためであれば。

いかなる罪に手を染めようとかまわない、と。
クランディーイのなかで、迷いが消えた。
淡く笑った彼女の顔を、もし目にした者がいたならば、その人物は衝撃に息を飲んだに違いない。
なぜなら、このとき、彼女は慈悲深さと酷薄さという、相反する印象を同時に矛盾なく放っていたからである。
狂気という表現が、最も近いと言えたかもしれない……。

ウィランシーダの容体は持ち直した。
そのことは手放しに喜んだウォルセイヤだったのだけれど、悩みがないわけではなかった。
一番の悩みは、やはりあの『お守り石』のことだった。
近くにあるだけで、気分が悪くなるものを、常に身につけておきたいわけがない……のだが、そうとも言っていられない羽目に陥ったのだ。
つまりは、ハークナー夫人の追及が問題だった。

再び石を取り替えて以来、あの中年の女性は、ことあるごとにウォルセイヤに首飾りのことを聞いてくるようになったのだ。

なぜ着けていないのか――と、問われても、まさか正直に言うわけにはいかない。わざわざ誂えてもらったお守りに、けちをつけるようなことはできないではないか。おまけにハークナー夫人は、折角の首飾りを着けないというのは、もしかして、着けたくても着けられないからではないのか――とまで言い出したのだ。

つまり、換金したのではないのか、というわけだ。

冗談ではなかった。

(あんな物騒なもの、誰がほいほい売るもんですか！)

とは思ったが、首飾りを一時期ウィランシーダと取り替えていたことは秘密なので、ウォルセイヤは沈黙を守った。

実のところ、その件に関しては、誰にも内緒だと念押しされたこともあって、口外するわけにはいかなかったのだ。

本当は、誰でもいいから、話を聞いてもらいたいと思っていたのだけれど。

ウィランシーダには、聞けない。一度だけ、話題にしたときに彼女が見せた表情が、あまりにも悲しげなものであったから。

彼女はきっと、なにかを知っているのだと確信した。けれど、そこに踏みいることはできなかった。いまも……それは同じだ。

そうして、周囲を見回してみれば、気安く相談できるような相手は、この屋敷のなかにひとりだっていないのだ。

ハークナー夫人は別としても、なんだか、この屋敷に勤めるひとたちはよそよそしい。ちょっとした噂話とか、仕事のグチぐらいは言い合えるのだが、それ以上のところに踏み込めないし、向こうも踏みこんでこない。

まるで、必要以上に自分に関わらないよう、命じられてでもいるかのようだ。

と、そこまで考えたとき、ウォルセイヤは自分のその考えが、あながち見当外れなものではない可能性に思い当たった。

そうして、よくよく思い出してみると、それはますます大きくなったような気がした。

(そういえば、いつも面倒を見てくれたのはハークナー夫人だったわ。あたしが新参者だから、面倒を見てくれているんだと思っていたけど……でも、あたしが困ったり迷ったりするときいつも、近くにいて声をかけてきたのがハークナー夫人ばっかりだったのって……そういうことって……!?)

そんな偶然があるものだろうか？

偶然でないとしたら、それはなにを意味するというのか？

「どういうこと……？」

途方に暮れて、ウォルセイヤはくしゃりと顔をしかめた。

無性に心細くなった。

けれど、相談できるひとは、この屋敷には誰もいない。

以前なら……ひとりだけ、いた。

ウィランシーダの家庭教師だったひと。

枕が変わって、なかなか寝つけない夜に、勝手に庭を散策し、その途中で親しく言葉を交わすことになった、栗色の髪と真紅の双眸を持つ青年――。

（ナウニーロ先生……）

この屋敷のおかしな点を、遠慮なく言える相手は彼だけだった。

でも、同時に恐ろしかった。

理解できない、得体の知れない空気が常に彼の周囲にあった。

だから……最後のところで、信じることができなかったのだ。

そしてやったことは――。

（あたしが……遠ざけた……）

自分で、選んで。
いくら悔やんでも悔やみ足りない。
（先生……！）
今、このときこそ。
（先生……！）
話を聞いて欲しい、と、ウォルセイヤは思った。

6

クライモン伯爵邸が慌ただしくなったのは、ウィランシーダの容体が安定した三日後のことだった。

なにごとかと思ったウォルセイヤに、屋敷の主――クライモン伯爵が帰宅するのだと教えてくれたのは、ウィランシーダ付きの侍女だった。

「伯爵さまが……」

やはり、ウィランシーダの見舞いだろうか――そう思いながら、ウォルセイヤは胸の奥がざわざわするのを感じた。

恐ろしいというのとは違う、だが妙に落ち着かない気分だった。不安というのが一番ぴったりくる表現かもしれない。

だが、そんな彼女の心中を知る由もない侍女は、彼女の顔が不満げに見えたのか、たしなめるようにこう言った。

「仕方ないのよ、伯爵さまはお忙しい御方なんだから……。ここしばらくはお出でにならなかったけれど、いつもお忙しい合間を縫って、お嬢さまの顔を見に駆けつけてらっしゃるんだから」

高齢のため、一線を退いた老公爵の代わりに、王都に詰めることが多いという伯爵と、ウォルセイヤは面識がない。そのことを知る侍女は、だから気を回したのかもしれない。

「別に、不満だなんて……」

思ってはいないと、答えようとしたときのことだった。

ハークナー夫人の、呼ぶ声が聞こえた。

「ウォルセイヤ。いらっしゃい。旦那さまがあなたにお会いになるそうです。くれぐれも失礼のないよう、きちんと振る舞うのですよ」

どきん、と胸が大きく鳴った。

そんな彼女の不安を読み取ってか、夫人は安心させるように、小さく微笑んだ。

「緊張することはありません。あなたに問題がないことはわたくしがよくわかっておりますからね」

「は、はい」

と、うなずいて、彼女は夫人の後をついて歩きだしたが、胸の奥の不安は薄まるどころか、

大きくなるばかりだった。

（なぜ、こんなに不安なのかしら……？）

自分でも理解できない思いを抱えたまま、伯爵が待つという部屋に通されたウォルセイヤは、室内に、伯爵とは別に、女性がたたずんでいるのに気づき、息を飲んだ。

（こ、のひと……）

このひとだったのだ、と、直感した。

自分がなぜ、あれほどに不安を覚え、緊張したのか――原因は、このひとだったのだ、と……！

そして、相手もまた、そんな彼女を驚いたように見ていた。

「お前……お前は……！」

そのひとの青灰色の双眸に浮かんでいたのは恐怖。

そしてそれはすぐに、殺意へと変化した。

（殺される……！）

ウォルセイヤは直感した――。

反射的に逃げ出そうとした彼女はしかし、そうすることができなかった。

あの守り石の首飾りの鎖が縮み、喉をしめつけたのだ！

『お礼を申し上げるのですよ』

ハークナー夫人にそう言われ、ぞくぞくするのを我慢して、身につけてきたのだが……それが、完全に裏目に出たのだ。

（息ができない……苦しい……誰か……）

助けて、と思うより先に、彼女の意識は遠ざかった。

そうして彼女は拘束されたのだ……。

「聖石の子供ですわ。なんということ……濾紙の役目を果たさないわけですわ、あれは間違いなく聖石の子供です」

クライモン伯爵邸の一室で、ウィランシーダの伯母であり、寿桑の神殿では第二の地位にある神官――クランディーイははっきりと言い切った。

狼狽したようにかぶりを振るのは、彼女の義弟であるクライモン伯爵だった。

「まさか！　こちらの調べではそんな報告はいっさい……」

「ええ、それは神殿の調べでも同じでしたわ。ですから気づかなかったのです……あの子はお

そらく、聖石を抱いて生まれてきたことを、神殿に届けられなかったのでしょう。たまにあることなのです、子供を手放したくないがために、あるいは子供の能力を利用するために、聖石の子供だという事実が秘匿されてしまうことが……けれど」

もしかしたら、そうではない厄介な事情がからんでいるのかもしれません――。

思わしげな顔で、そうつぶやいたクランディーイに、伯爵が訝しげに問いかけた。

「どういうことだ……？」

「事に依ると、寿桑以外の神殿が絡んでいる可能性がございます。あえてこちらには伏せて、派遣された人員である可能性も捨てられません……」

絞り出すようなその声に、クライモン伯爵の顔が奇妙に歪んだ。

「神殿が、内密に使徒を派遣したというのか？」

「その可能性も打ち消せぬということですわ。国内はともかく、他国の神殿にまで、わたくしの力は及びませんから……。幸い、瘴気と呼べるほどの毒気が出回っているわけではありません。今のうちに手を打てば――」

神職にある者とはとても思えぬ言葉を口にしたクランディーイに、しかし伯爵は驚く様子も見せず、うなずいた。

共犯者となって十有余年――その年月のなかで、彼らの意識には大きな変質が生じていた。

「怪しいのは、この娘だけなのか？　ほかには――」
問いかける伯爵に、クランディーイはゆっくりとかぶりを振った。
「屋敷内では。寿桑全体でははっきりと言い切ることはできませんが、それでも使徒と呼べるだけの力の持ち主は感じ取れません。今ならば、方法を変えることで、たやすく追及の手をかわせましょう」
いつか、寿桑の街の抱える歪みに気づく者が現れる――それは、以前からわかっていたことだった。
だから、そうなったときのための策もふたりで何度も話し合った。
ではなぜ、危険を伴ういまのやり方をつづけてきたのかと言えば、それ以外の方法で手に入れられる生気の量が、格段に少なくなってしまうからだった。十まで生き延びることは難しいといわれたウィランシーダを生き永らえさせるためには、なにより大量の生きるための力が必要だったのだ。
だがこうなった以上は、贅沢は言っておられない。
いまさら、罪のひとつやふたつ、増えることを気にする立場でもない。
「では、あの娘の口を封じることにしよう」
あっさりと伯爵が言えば、クランディーイもこくりとうなずいた。

伯爵にとっては最愛の妻の忘れ形見、クランディーイにとっては唯一の肉親である妹の娘――ウィランシーダの生をつなぐことは、もはや宿願……生きがいになっていた。

あるいはすでにふたりとも、罪を重ねすぎていたのかもしれない。

重ねつづけた罪ゆえに、ふたりは更なる罪に対する恐れや不安に鈍感になっていた。

愛ゆえに、ひとはたやすく罪を犯すものなのだ……。

ウィランシーダにとって、世界の中心は父親であるクライモン伯爵と、伯母であるクランディーイだった。

ずっと、長いことそうだった。

病弱な体はことあるごとに悲鳴を上げ、その度にもうだめだと思ったけれど……もう耐えられないと思ったものだけれど、大好きなふたりが「大丈夫だから」「もう少し頑張ってみましょう」と言ったら、なんだかそうできるような気になって、だから頑張れた。

ふたりとも……それに、ハークナー夫人も、とても自分のことを大切に思ってくれているのがわかったから、どんなに辛くとも、頑張ろうという気になった。

（大好きなお父さま……大好きな伯母さま……大好きなハークナー夫人……）

けれど、自分が生き延びる度に、どれほどの犠牲が積み重ねられたのか――知ってしまってからは、彼らの愛情が重く感じられるようになった。

ウィランシーダだとて、馬鹿ではない。

何人もの、学友たち。一度屋敷を辞した後は、便りひとつ届かなくなった友人たち――父やハークナー夫人に訴えても、満足できる答えを得ることはできなかった。

だから、新参の使用人に小遣いを渡すことで、以前話してくれた住所に手紙を送ってもらったのだ。

最初の二通には返事がなかった。

届かなかったのか、それとも答えを寄越すつもりがなかったのか――。

三人目の学友に当てた手紙への答えを返してくれたのは、その幼友達だという少年だった。彼女は死んだ、と。死んだのだと知らせのみが届いたのだと――拙い文字でつづられた文面にはあった。

けれど、最初から不吉な予感を覚えたわけではなかった。偶然なのだと、そう思うことはできたのだ……少なくとも、三度目までは。

けれど、まるで選んだように、自分の学友となった少女たちが……例外なく命を落としてい

ることに気づいてしまったら……もう、知らんふりはできなかった。

直感と呼ぶ以上に強いなにかで、確信してしまったのだ。どんな方法が用いられているのかはわからない……けれど、自分が生き永らえているのは、彼女たちを犠牲にしているからなのだと。

やっているのは、多分……間違いなく、父と伯母とハークナー夫人……。

わかっているのに、ウィランシーダはその事実を糾弾することができなかった。彼らが真実、自分のことを思った上でそうしていることがわかっていた上に、彼女は……それでも彼女は、死にたくなかったからだ。

けれど、一度見えてしまった現実は、あまりにも残酷すぎた。彼女は無知で無邪気な仮面を被ることで、その痛みから逃れようとした。

彼女たちはみな元気なのだと、いまは家の事情で一緒にいられないのだけれど、いつかは必ず戻ってきてくれるに違いないのだと。

それは逃避に過ぎないと、わかっていたが、それだけではない効果もあった。嘘だとわかっていても、そうだと思っている間は、体調が安定したのだ。極端に体調を崩したりした後に、決まって友達が姿を消すことには気づいていたから……なるべくそうさせないように、彼女は彼女なりに努力してはいたのだ。

このままでは死んでしまうから、どうか逃げて――とは、言えなかったけれど。

言えなかった理由は、死にたくないからだけではなかった。

彼女は……屋敷に連れられてくる友人たちのことを、心から大好きで大事だと思う反面、どうしようもなく憎んでもいたのだ。

自分には許されなかった健康な手足を持つ少女たち――ウィランシーダが喉から手が出るほどに望んでも、決して手に入れることのできないものを、生まれながらに与えられながら、彼女の身分や、浅ましい方法でそそぎこまれた、他人の命がもたらした偽りの美を羨む少女たち……。

いや、羨み妬む程度なら、まだ許せた。

耐えがたかったのは、自分を、女神の御使いかなにかのように崇拝する者たちだった。他人の命を啜りながら生きる自分のどこが崇高だというのか。奇跡のよう――と皆が口々にたたえる美貌など、ひとの道から外れた邪法の賜物だというのに！

だから、ウィランシーダはある意味、そんな愚かな少女たちの死を平然と受け入れてもいた。

けれど同時に、同じほどの強さで、この邪法による生の終焉を待ち焦がれてもいたのである。

だから、彼女は賭をした。

もしもこの先、自分の命より、未来より、大切だと思える存在を見つけることができたなら……そのときは、そのときこそは。

勇気を、振り絞ろう、と。

そして、それは今をおいて他にない。

(頑張らなくては……)

でなければ、あの春の化身のような、健康的な少女は失われてしまう。

それは絶対にイヤだと感じていた。同時にこれが最後の機会だとも……心のどこかでわかっていた。

ウォルセイヤだけが、なぜ特別なのか——理路整然と説明することは難しい。

彼女は別に、ウィランシーダの真実の姿を見抜いたわけではなかった。これまでの少女たち同様、ウィランシーダのことを褒めたたえようとした。

ただ、彼女はだからと言って、ウィランシーダのことを羨んだり妬んだりはしなかった……そして、ほかの誰も『お守り石』だということだけで、疑うことなく受け取った首飾りに仕掛けられた罠を、直感で見抜くと同時に全身全霊で拒絶しようとした。

彼女なら、いずれ真実を見つけてくれるかもしれない、とそのとき思った。

だから、守り石の首飾りを、自分のものと交換した――我ながら、意地の悪い罠だったと思う。

ウォルセイヤのために調整された守り石を、自分が身につけていれば早晩、体調に変化が生じることはわかりきっていた。

そのとき、彼女がどう動くのか――それを見たいがために、ウィランシーダは敢えてその策に賭けたのだ。

そうして、ウォルセイヤは再び首飾りを取り替えることを選んだ。

そこまで見届けてようやく、ウィランシーダは心を決めることができたのだ。

なんという浅ましさ、なんという計算高さか。

ウォルセイヤが知れば、深く傷つくに違いない。あるいは烈火のごとく怒り狂うだろうか……？

（それでも、セーヤ……）

声にならぬ声で、彼女はつぶやいた。

「醜悪なだけだとわかっていても、わたしはここまで確かめなければ、決断することができなかった……なんて、未練たらしい……でも、それがわたしなのだわ」

つぶやくウィランシーダの目尻から、つう、と涙がこぼれた。

彼女が、邪法に縋って永らえる生への決別を、心に期した瞬間だった。

だるくてうまく動かない体を、ウィランシーダは必死に動かそうとした。

けれど、体にはもう、うまく力を使いこなすことができなくて、寝台に体を起こすのがやっとだった。

「なんで……」

泣きだしそうな声で、彼女はつぶやいた。

「やっと、けじめをつける覚悟がついたのに……なのに……」

そのための力が、すでに自分にはない。

「なんて、情けない……悔しい……どうして……」

もっと早くに、決断できなかったのだろう、自分は!?

「悔しい……」

歯を噛みしめながらのつぶやきを洩らす彼女に、問いかける者があった。

「死んでも?」

やさしい、やさしい声だった。
声は重ねて問うた。
「そうすることで、たとえきみが死ぬことになっても？」
（ああ、この声を知っている……）
と、ウィランシーダは思った。
美しく、やさしく、けれど謎めいた目をしていたひと――そのひとの瞳ゆえに、どこかで不安を覚えずにはいられなかった……真紅の双眸の……。
「ええ」
と、ウィランシーダは答えた。
「ええ、たとえそうなっても……先生」
ナウニーロと名乗っていた、先日まで家庭教師であった青年の姿を目にしつつ、彼女ははっきりとそう答えた。
髪の色が違う。身にまとう空気も、この屋敷にいたころのそれとはまるで違っている。
それでもウィランシーダは、それが誰であるのか、間違うわけはないと思った。
そのひとの髪は白――肌もまた、極上の磁器のごとき色。ただ双眸に宿る色彩だけが、鮮血で染め抜いたかのような、真紅。

青年は、それを聞くなり「そう……」とうなずいた。

不意に、ウィランシーダはわかったような気がした。なぜ、ウォルセイヤの言葉があったとはいえ、あれほど簡単に、この青年を遠ざけることを選んだのか――。

青年からは、濃厚な、死と滅びの気配が伝わってくる。

不法なる生に絶望しながら、それでも生き延びることに恋々としていたあのころ、この気配は恐ろし過ぎた。

バルヴァローズの母なる女神――セイトーリ。その最後の息子である死神ナラムタールとは、こんな姿を……否、こんな空気を纏っているのではないだろうか。

ウィランシーダはそう思った……。

7

うまく頭が働かない。

（ええっと……なにがどうなったんだっけ……）

寝台の上で、ウォルセイヤは必死に考えをまとめようとするが、うまくいかない。

恐らくは室内に満ちる香りのせいだった。人間の正常な思考の働きを妨げる香というものがある。それを嗅ぐと、ひとは指一本動かすのも億劫になり、なにか考えようという気力さえなくなってしまうのだ。

その証拠に、彼女の手足の自由は奪われてはいなかった。

どうせ身動きできないのだから——というだけの理由ではなさそうだと、ぼんやりする頭で、それでも彼女は考えていた。

（多分、死体が見つかったとき、縛られた痕が残ってたりしたら、後々面倒になるとでも思ったんだわ……）

では、少なくとも、明らかに不審を招く殺し方を選ぶつもりはないのだと、結論づける。事故を装う線が、最も濃厚だろうか。

なりふりかまわず殺してしまうには、この街は治安が行き届きすぎている。

(だとしても、あんまりのんびりはしてられないわ。殺してから別の街に運ぶことだってできるんですもの)

通常、そんなことはまず不可能だ。

本格的な夏が近づきつつあるこの時期、遺体の傷みはどうしても早くなるし、腐敗を遅らせるには相当な金と手間隙がかかるからだ。

けれど、ウォルセイヤを殺そうと思っているふたりなら、さほど難しいことではないのだ。財も権も持つあのふたりなら……そう、簡単にできてしまうことだろう。

かつて、ウィランシーダの命を永らえさせるためだけに、雇った少女たちの死を、うまく誤魔化したときのように。

なぜ、自分がそんなことを知っているのか、もはやウォルセイヤは不思議には思わなかった。なぜなら彼女は、すべてのからくりが見えた時点で、一時的に封じられていた記憶を解放されていたからだ。

だから、彼女は待っていた——現実的な意味で、自分をこの状況から救い出してくれる実働

班の動きを。

そして、それはほどなく起こった。

きしん、と、なにか硬いものが断ち切られるような音が聞こえたかと思った瞬間、鉄格子（てつごうし）のはめられた窓のある方向から、風とともに、どこかとぼけた青年の声がかかってきたのである。

「ウォリィ、ちゃんと、生きてるんだろうなー？」

それが誰であるのか、認識するのは簡単だった。

鉄格子ごと、窓を両断して部屋に入って来れる者など――そんな剣と腕前の持ち主など、バルヴァローズ中を探しても、数人きりしか見つかりはしない。

「生きてますよっ、トリノアークさまっ！」

香の影響で、さすがに飛び起きることはできなかったが、風が入ったおかげで、みる間に効果が抜けていく。

おかげで、頭がすっきりした。

ウォルセイヤ――いや、ウォルセイイ……彼女は特異な『水晶（すいしょう）の使徒（しと）』だった。

彼女の力は、隠すことにある。いかなる聖石の力であれ、その主の気配であれ、彼女の生み出す子供石は、隠し通すことができる。

だからこそ、彼女はこの街へ派遣されることとなったのだ。

明らかに不正がなされておりながら、未だ事態が明らかにされていない——恐らくは街の統治に関わる人物と、神殿内部においてそれなり以上の地位にある者たちが結託しているとしか考えられない……そんな騒ぎが生じたこの街に。

諜報行動が目的ではない。彼女の役目は、あくまで補助的なものだった。

すなわち——今回で言えば、ふたりの強大な力を持つ使徒——ナウルニールとトリノアーク。彼らの気配を感じ取らせないためには、彼女はある程度未満の距離で、彼らとともにある必要があったのだ。

クランディーイが、紅玉と青玉の使徒の存在に気づかなかったのも、彼女がいてこそのことだった。いや、彼女は自分自身にも、『隠形』をかけることができる。だから……重要な秘密は、なにひとつ洩れ出ることがなかったのだ。

「そんじゃ、おれはケリつけに行ってくるから、ウォリィもさっさと逃げ出せよ？　なんなら、騒ぎが終わった後で、迎えにきてやるから、どっかそこいらに隠れててもいいんだし……」

気楽そうにそう言い切り、身を翻そうとした青年の首に、必死の思いでウォルセイイは飛びついた。



そして、叫んだ。

「あたしも行きます！」

夢中だった。

「絶対に、行きます！」

叫ぶウォルセイイの脳裏には、結果的に騙してしまった少女の顔があった。

ウィランシーダ。

生まれると同時に、十まで生きられない体だと、医師に宣告された少女。

その命を永らえさせるために、父親と伯母を罪に追いやった少女。

けれど、そんなことは知らない少女――。

会ってなにがしたいわけでもなかった。慰めの糾弾も、自分のすることではないとわかっていた。

それでも――会わずにはいられない、とそう思った。

この決着がつくときに……。

行く手を遮る者がいた。
ウォルセイイにはすでに予想がついていた相手だった。
クライモン伯爵ラトルラード。
ウィランシーダの寝室へと続く回廊に、立ちふさがり、かのひとは剣を構えていた。
「退きな」
鋼玉の使徒は短く言い捨てた。
「いいから退きな。誰彼かまわず斬りたいわけじゃあ、ないんだ」
それは紅玉の使徒――トリノアークの紛れもない本音だった。
しかし、ラトルラードは退かなかった。
退け、なかったのだ。
退くこと、それすなわちウィランシーダの死を意味している。そうと自覚していて、どうして退けるものか。
その思いは、痛いほどに伝わってきた。
大切な者を守りたい――どこまでも守りつづけたい。
限りなく共感できる思いだったからこそ、ウォルセイイは叫ばずにはいられなかった。
「なら、なんでっっっ！」

あんな歪んだ方法を選んだんですっっっ!?

「それしかなかったからだ！」

伯爵の答えには迷いはなかった。

同時に、彼の、こちらを抹殺する意図を感じた。ここまで赤裸々な本音を語ったのだ……ただですますはずがない。

「あれを救うためだ……他に道などなかった！　どうせ、処刑されるのを待つだけの屑どもだ。有益に利用してなにが悪い!?」

「そういうのを詭弁だっていうんだよ！　第一、あんたらはそいつら以外の人間も犠牲にしてきたはずだ。綺麗事が通るとは思うなよ」

叫ぶなり、トリノアークは剣の柄を、ラトルラードの鳩尾に埋めた。

がくんと力を失い、その場に倒れこむ伯爵を尻目に、褐色の青年がなおも進もうとした。

それを阻んだのは、極上の長衣に身を包んだ、年配の女性だった。

「させるものですか……！」

必死の形相で、両手を広げるそのひとが誰であるのか——もはや聞くまでもなかった。

「あなたたちになにがわかると言うの!?　あの子は……わたくしにとって、たったひとり残された血族なのよ。あの子を死なせないためなら、わたくしは……！」

たまらず、ウォルセイイが叫ぶ。
「だけど、迷ってらっしゃったはずです！」
と――。
「……なにを……」
「迷ってらっしゃったはずです。だって、そうでなかったら、クランディーイさまの子供石に、曇りが生じるはずがありませんもの！」
寿桑における異変を調べる上で、彼ら三人がクライモン家に目星をつけたのは偶然ではなかった。
クライモン伯爵の義姉にして、神殿の有力者である水晶の使徒――クランディーイの生み出す聖石の子供石に、内包物ではない曇りが認められるようになった話を聞き、あるいはと思い、内偵に踏み切ったのだ。
以前はなかった曇りが子供石に現れたというのなら、最も考えられるのは、その人物の精神的変化だ。
しかも意外なことに、生み出す者の意識が邪に傾いたとしても、石は曇るとは限らない。美しさはそのままに、属性だけが変化するのがほとんどだ。
つまり、曇るということは、その者の心に深い迷いが生じたときに限られる――と言われ

る。無論、強力な瘴気にさらされ、宿る力を使い果たした場合は別の話だが。

その、ウォルセイイの言葉に、力尽きたかのごとく、クランディーイはがくりとその場に膝をついた。

「曇った……わたくしの水晶が……」

呆然とつぶやく彼女の顔は、一気に十ほども年取ったかのように見えた。

「では……わたくしは、自らあなたたちを呼びこんでしまったと……？　なによりあの子の生を望んだわたくしが……」

信じられない——いや、信じたくないと言わんばかりに、何度もかぶりをふったクランディーイが、はっと息を呑んだのは次の瞬間のことだった。

空に、あざやかな——青一色の虹がかかったのである。

「あ、れは……」

「やったな」

と、同時にトリノアークがつぶやき、うなずいた。

いつの間にか、剣は腰の鞘に戻っており、その右手には鳩の卵大の、極上の紅玉が握られていた。

無造作に、彼はそれを空に放り出した——高く、高く。

青い虹に届くほどに、高く。

そうして、再び彼の手の中に戻ってきた紅玉には、凄まじいまでの力が宿っていた。

「ほらよ」

と、言い、彼はクランディーイにその紅玉を握らせた。

「ナニィの邪気払いの剣は無敵だが、その分無駄に放たれる力も大きい。瘴気や邪気が世界の均衡を乱すのは有名だが、大き過ぎるとなれば、おれたちの力だって似たようなもんだ。幸い、紅玉と青玉は兄弟みたいなもんだから、あいつが力を揮う度、おれがこうして余った力を子供石に封じ直してるってわけだが……」

嬢ちゃんにでもやりな——と、彼は告げた。

「上手くすれば、二年や三年は寿命がのびるだろうよ。あんたたちがやったことで、嬢ちゃんまで、罪悪感に押しつぶされる必要はない。少なくとも、そんなものから自由になって、ほんの数年生きたところで、神さまたちだってバチは与えないだろうよ。もしかしたら、その間に体が丈夫になる可能性だってあるんだしな」

その言葉を聞いたとたん、クランディーイははらはらと涙をこぼした。

声にならぬ声で、感謝の言葉らしきものをつぶやく様子を見せたが、彼女がなにを言ったのか、ウォルセイイは確かめることはできなかった。

そのときすでに、彼女はトリノアークの後を追い、青玉の使徒ナウルニールと合流すべく歩きだしていたからだ。

けれど、ほどなく、ウォルセイイは知る。

その紅玉は使われることはなかった。

ほかならぬウィランシーダ自身が、紅玉に宿る力の恩恵に与(あずか)ることを拒(こば)んだのだ。

エピローグ

肌を突き刺すような夏の陽差しが、そろそろ秋のやわらかなそれに変わろうというころ、ウォルセイイは北寿桑のクライモン伯爵邸を訪れていた。

ハークナー夫人の姿は見えなかった。

顔見知りの侍女の先導で、その部屋に入った彼女は、最後に会ったときからは、想像もできぬほど、やせ細ってしまったウィランシーダの姿を見いだした。

寝台に半身を起こした少女の顔色は、蠟を思わせるほどに白く、夜着から覗く手首は、折れんばかりに細かった。

そのせいばかりでもなかろうが、彼女の異様なまでの美貌もまた失われていた。決してみっともなくはないが、そこにいるのは、痩せた、普通の少女だった。そして、その手には、以前は屋敷中を探しても、ひとつとして見つからなかった鏡があった。

「わざわざお呼び立てしてしまって御免なさいね」

小さく頭を下げるのに、ウォルセイイは「いいえ」とかぶりを振った。
本来なら、ひとと会えるような状態でないことを、彼女はすでに知っていた。
ウィランシーダの命を繋いできた他者の生気――それを受け入れるための道が閉ざされてしまったいま、彼女の先は長くない。そうなることを承知の上で、彼女はトリノアークたちに事態の終息を委ねたのだ。
紅玉と青玉の使徒たちは、彼女と寿桑に息づく『歪み』を繋ぐ形代――クランディーイが生み出した水晶の首飾り――を破壊することを選んだ。現在、恐らくは世界最高の力を持つ彼らがそうした以上、いかなる者も、新たにウィランシーダに『道』を作り直すことはできない。
それは、早晩、彼女が不帰路をたどるということを意味した。
ウィランシーダはそれを受け入れたのだ。浅ましくも他者の命を啜り、永らえるより、短くとも胸を張っていられる生を選びたいと言って。
「不思議なものだわ。死にたくない一念で、罪深い時を過ごしていたころよりも、こうして寝たきりでいるほうが、なんだかしっかり生きているような気がするの」
どこかさっぱりした顔で、彼女は微笑んだ。
「ウィランシーダさま……」
「いつのころからか、わたし、気づいていたのよ、わたしが生きてられるのは、誰かの命をか

すめ取っているからだって……それをなさってるのが、お父さまと伯母さまだってことも……でも、やめてって、言えなかった。おふたりが、わたしのために罪を犯してることを知ってたのに……それでも、わたし、生きていたかった。浅ましい、罪深いことだとわかっていたのに、それでも生きていたかったの」

自嘲もあらわなこの告白に、けれどウォルセイイはなにも言うことができなかった。

生きて生まれてきた以上、誰がウィランシーダのその思いを責めることができるだろう……しかも、老人が不老不死を願うわけではない。

そう……願うだけであったなら、罪など存在しなかった。

「けれどね、狡い子供には罰が下るのよ。狡かったわたしは、段々、鏡を見るのが怖くなったの。セーヤ……いえ、なんとお呼びすればいいかしら……？」

小首を傾げたウィランシーダに、ウォルセイイは「セーヤで」と答えた。

「ウォルセイヤというのは、あたしが使徒に選ばれる以前の……生まれたときにもらった名前ですから」

それはつまり、偽名を名乗ったわけではないのだと——真実もまた、確かにあったのだということだ。

それを知っていてほしい——ウォルセイイの言葉の裏にあるものに気づいたのか、ウィラン

シーダが本当に嬉しそうに笑った。
「セーヤ」
そう呼んで、また笑う。
どこまでも透けてしまいそうな笑顔に、ウォルセイイは胸をしめつけられた。
「セーヤも気づいていたでしょう、この屋敷に鏡がないことに。セーヤやほかの皆が、わたしのことをとても綺麗だと思ってくれていたのは知ってたの。でも、わたしの目には、そうは見えなかったの。醜く浅ましい顔しか、鏡のなかに見えなかった。だって、あれはわたしが他人の命を横取りしたなによりの証だったんですもの。でも……手遅れにならなくて、よかった。わたしは罪人だけれど……その償いは、死んだからといって消えるものではないでしょうけど……でも、わたしはわたしとして生きて、死んで行ける。鏡を見ても、もう怖がらなくていいの。それが……そのことが、本当に嬉しいの」
そう言って、ウィランシーダは静かに目を閉じた。
「セーヤには、このことを、どうしても知っておいてほしくって……それと」
言いかけ、少女は迷うように一旦言葉を切った。
「それから……ひとつだけ、お願いがあって……」
その内容を聞くなり、ウォルセイイはためらうことなくうなずいた。

「嬉しい」
と、ウィランシーダがつぶやいた。
その笑顔とつぶやきが、ウォルセイイが最後に見たウィランシーダの記憶となった。

秋が過ぎ、冬も去り、再生の季節と呼ばれる春が訪れたころのこと――。
楠下の隣国――杉蔭の王都鋭樹のアスカニーリ神殿に、小さな包みが届けられた。
宛て人は、この神殿が抱える無二の水晶の使徒――ウォルセイイ。
差出人は……。
包まれていたのは、小さな手鏡だった。ウォルセイイがウィランシーダを最後に訪れたとき、少女が大切そうに握りしめていた品だった。
それを両手で包みこむようにして、その夜、ウォルセイイは泣き続けた。
彼女の脳裏には、最後に会った際の、少女の顔と声とが刻みこまれていた。
『お願いがあって……』
いまにも空気に溶けこんでしまいそうな笑顔の少女が口にした、ささやか過ぎる願い。

『わたしが生きていた証として……どうか、形見を受け取ってほしいの』

ウォルセイイ十六歳のときの出来事であった。

使徒として、ただひとを癒すのではなく、ときに断罪者の役目をも帯びねばならぬことを胸に刻んだこの一件を、彼女は生涯忘れなかった。

あとがき

こんにちは、『聖石の使徒』では半年ぶりの新刊です。
でも、ほかのシリーズに比べれば早い展開、かなあ。
はっ、自分で言ってどうするんだ（笑）。

前巻『其は天秤を……』ラストにおいて、無事使徒に出世した（？）アラクセイトたちですが、本人たち、まだそのことを知りません。
知ってたら、今回のような騒ぎに巻きこまれるようなことにはなら……なかったかな、はたして？　うーん、なんだか、知ってても事態は同じだったような気がしないでもありません。
彼らがやたら、トラブルに愛されるタチなのは、作者もわかってはいるんですが、三人が三人

ども――となると、いささか頭が痛くなったりします。

おかしいなあ、最初の予定では、トラブル誘因娘はアラクセイトひとりのはずだったのに……ええ、ほかのふたりは喧々囂々やりながら、そのフォローに走るという予定だったんです。なのに、蓋を開けて見たら、三人とも走る、走る。

とにかく好き勝手に走る。

一番走りにくいはずのソラミイノまで、『お兄さま』という重い十字架を背負わされたとたん、臨戦態勢に走ってしまったし。

ガネルオージェはガネルオージェで、目立つの厳禁ってこと、頭から無視しきった暴れっぷりだし……この先、末広がりに被害が拡大していくのが目に見えるようで、作者としては頭を抱えております。

今回、珍しくアラクセイトだけが――かろうじて――おとなしかったなあ。

でも、体調崩したせいだから、いつまでも期待できないだろうなあ……。

あるいは気持ち悪すぎて、プッツンすることも充分考えられるわけで……やめておきましょう。日本には、『言霊』というものがあるわけですから。

それはともあれ、私はアラクセイトのように、毒気にあてられて体調を崩したことはありませんが（友人には、似たような経験をしたというひとがいますが。きっと、感性が敏感なんで

しょうね）、ちょっと違う意味で、彼女の台詞――「頭のなかをぐるぐるかき回されているような感じがする」というのは経験したことがあります。

いや、それは単にお前が方向音痴なだけだろう、と言われてしまうと、反論の材料はないわけですが、何度行っても迷ってしまう土地があり、そこを歩く時、そんな感じを受けてしまうわけであります。

いくら方向音痴の私でも、十回以上訪れたことのある界隈（あくまで徒歩圏内の、ごく狭い地域である）なら、さすがに迷いはしません。

しかし、一カ所だけ、そんな私の自信を覆す場所があるのです。

いえね、行きつけの店とかには、なんとかたどりつけるのです。それについては、決して知らない道に入らない、と決めているからなのですね。

ところが、方向として、駅はあちらのはずだから――とか、思って知らない道に入ると、必ずと言っていいほど、迷うわけです。因みに、前述の条件をクリアしたほかの土地では、迷うほどの目にあったことはありません。

その、「変だな、おかしいな。こっちで間違いないはずなんだけど……」と思いつつ、迷ってる最中、私が覚えるのが「頭の中を……云々」の感覚なのです。

もしかしたら、青木ヶ原樹海のなかを歩くのって、こんな感じなのかしら。

とか、思ったりもしますが、目下のところ、青木ヶ原を訪れる予定はないので、確認しようがありません。

今回、『其は水に……』が続いているので、もう一編のほうに話題を移しましょう。

『玻璃の籠』

これは、雑誌Cobaltに、二回に渡って掲載された作品に、加筆修正したものです。

影の主役は鋼玉コンビ――ガネルオージェの師匠二人組です。

ナウルニールとトリノアークのふたりを書くのは非常に楽しいです。アラクセイトたちとはまた違う種類の掛け合い漫才をやってくれるものですから。

しかし、彼らが登場する話はやや痛ましいものが多いというのも事実……なぜだろうと思うのですが、どうやら『重めのネタには彼ら』と、勝手に頭が決めているきらいがあるようです。

とはいえ、たまには勧善懲悪ぶっちぎりな話で活躍させてやりたいとも思う私……せっかく剣を持ってるんだから、派手な大立ち回りとかやってほしい。

次に機会があったらやってみようかな。

彼らについては、もう一組の師匠コンビ同様、まだまだ明かしていない設定が山とあるので、再登場は必至です。もちろん、珊瑚コンビのほうも（笑）。

危なかしい弟子三人組同様、師匠コンビ×2の活躍も、楽しんでいただけたら幸いです。

ここしばらく、暇を見つけては、とあるゲームに勤しんでいます。とはいっても、RPGではありません（時間がかかりすぎるんですもの。封印されたままの『幻水Ⅲ』は、いつ始められることか……）。

某囲碁マンガに嵌まって久しい私ですが、問題の囲碁はいの字もわからない初心者……以前PS版の囲碁ソフトに挑戦したことはあったものの、敢えなく玉砕の憂き目にあい、以来「囲碁なんて高尚な頭脳ゲームをやるには、私の頭は悪すぎるのよ」と、慰めにもならないことを自分に言い聞かせてきたのですが……。

しかし、ミーハーな情熱は、苦手意識すら凌駕するもので、

「ああ、ヒ○ルと打ちたい、アキ○と打ちたい」

とゆーわけで、ヘボを承知でGBソフト『ヒカルの碁』に手を……。

初心者にも安心というあおりに間違いはなく、優しく親切で美人な佐為先生の指導の元、ヘボはヘボながら、楽しく対局の日々を送っております。

とはいえ、所詮はヘボ。未だ十三路盤止まり……果たして棋力がアップする日が来るのかどうか、大いなる謎であります。

少し古い話になりますが、夏に九州の家に里帰りしました。

当初の予定では、墓参りのほか、温泉つかったりして疲れをとりたいとか、密かな野望を胸に抱いていたのですが、なんと、戻ったころに台風が……(泣)。なにも、私が里帰りしてるときを見越したように、来なくてもいいじゃないか、台風よ。おかげで予定は予定のままに終わりました。

台風一過の後の空気は美味しかったですけどね。

さて、そろそろ結びとまいりましょう。

永田さま。

またしても……とんでもない状況を招いてしまい、申し訳ありませんでした。来年こそは、このようなことのないよう、精進いたしますので、よろしくお願いします。

山本鳥尾さま。

毎回のことながら、厳しいスケジュールになってしまい、心からお詫びします。今回の表紙には、ワレンアイノさまがご登場の予定と聞き、いまから楽しみにしております。

そして、読んでくださる方々――。

つづいてしまい、本当に申し訳なく思っております。なるべく早く、つづきを出すつもりですから、どうかしばらくお待ちください。

この本が発売されるころには冬本番となってるでしょうが、美味しいものをたくさん食べて、体力つけて乗り切りましょう。風邪予防には緑茶嗽が効果があります。

では、次の本にて――。

平成十四年　初冬

前田　珠子

この作品のご感想をお寄せください。

前田珠子先生へのお手紙のあて先

〒101－8050　東京都千代田区一ツ橋2－5－10
集英社コバルト編集部　気付
前田珠子先生

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、最近では実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



聖石の使徒
其は水に遊ぶ者

COBALT-SERIES

2003年1月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著　者　前田珠子
発行者　谷山尚義
発行所　株式会社 集英社

〒101−8050
東京都千代田区一ツ橋2−5−10
(3230) 6268 (編集)
電話　東京 (3230) 6393 (販売)
(3230) 6080 (制作)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2003　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社制作部宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN4-08-600204-3 C0193

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし子供たちが、世界を守る。

前田珠子 〈聖石の使徒〉シリーズ

イラスト／山本鳥尾

聖石の使徒

其は焔をまとう者

世界を守る「聖石の使徒」となるべく少女アークは神殿で修行をするが…。

聖石の使徒

其は力を放つ者

落ちこぼれのアーク。うちに眠っている絶大な力を制御できなくて…。

聖石の使徒

其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ

親友ミイノと修行の旅をするアークが、神殿から受けた知らせは？



〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし少女よ、魔性に立ち向かえ！

前田珠子 〈破妖の剣〉シリーズ

イラスト／廈門 潤



漆黒の魔性

白焔の罠

柘榴の影

紫紺の糸（前編）（後編）

翡翠の夢1～5

鬱金の暁闇1・2

女妖の街 破妖の剣 外伝①

ささやきの行方 破妖の剣 外伝②

忘れえぬ夏 破妖の剣 外伝③

時の螺旋 破妖の剣 外伝④

魂が、引きよせる 破妖の剣 外伝⑤

呼ぶ声が聞こえる 破妖の剣 外伝⑥

コミック版 好評発売中

破妖刀・紅蓮姫を操る剣士ラスの
愛と闘い…大人気ファンタジー！

前田珠子/厦門 潤

破妖の剣
魔性降臨
白い焔に包まれて消えた街——その原因を探るラスと少年ザハトだったが!?



破妖の剣
紅の魔剣 碧の魔胎
最愛の使い手を失い暴走する紅蓮姫…。ラスと出逢う前の紅蓮姫の哀しい物語。



破妖の剣
深紫絃韻 1 2
魅縛師リーヴィの里帰りに同行したラスは、思いがけないピンチにおちいるが…!?



〈好評発売中〉 コバルト文庫

とびきり有能な人材、提供しますー。

イズァーカ商会へようこそ

前田珠子
イラスト／鈴木理華



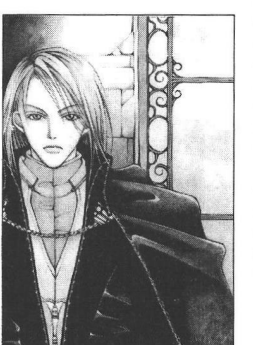
イズァーカ商会はどんな厄介事も引き受ける、世界最大にして唯一の人材派遣会社。特殊護衛課のカリンたちのもとには今日も物騒な依頼が舞い込んできて!?トラブルコメディ！

〈好評発売中〉 コバルト文庫

約束の庭でほほえむ、美しい妖魔。
華麗なる王国の幻想ファンタジー！

タラスタロスの庭

前田珠子
イラスト／木々



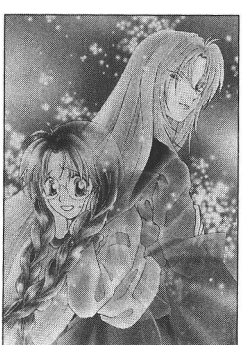
狂王カァスタイーンは残虐な殺戮の末、遂に広大な国タラスタロスを平定した。だがその裏には、選ばれし者にしか見えない、空中に浮遊する庭で会った妖魔との約束があった…。

〈好評発売中〉 コバルト文庫

新宿に吸血鬼出現？私が巫女体質？
ファンタジック学園コメディ！

女神さまのお気の向くまま1〜3

前田珠子
イラスト／辻 よしみ



異界から侵入してくる怪物から「こちら側」の世界を守っているふたりの女神さま。そのひとり・嫦娥の依巫となってしまった高校生・桜子は超多忙、大迷惑な毎日を過ごしていて!?

〈好評発売中〉 コバルト文庫

美しく切ない叙情ファンタジー

前田珠子 〈月下廃園〉シリーズ

イラスト／江ノ本瞳

月下廃園

月華の国の王子で、風の愛し児トゥミャーンは、王宮の庭園で出会った美しい人物が忘れられず…。

月下廃園2

ある想いから、自らを月華の王宮の庭園に呪縛しているセジュン。そんな彼を慕うトゥミャーンだが。

月下廃園3

トゥミャーンは光明神殿の使者として、セジュンが消えた月華に3年ぶりに戻ったが!?



〈好評発売中〉 コバルト文庫

目覚めよ、永遠楽土を守る聖獣たち！

前田珠子 〈聖獣〉シリーズ

イラスト／おおや和美

まどろみの守護者
聖獣復活譚 前

銀の守り手
聖獣復活譚 後

目覚める日
聖獣覚醒秘譚　第一部

深き闇の檻
聖獣覚醒秘譚　第二部

昏き夜の果て(上)(中)
聖獣覚醒秘譚　第三部

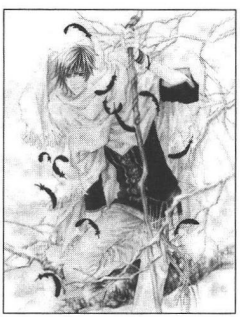


〈好評発売中〉 コバルト文庫

獣の耳の救世主、魔王の暴走を止める！

ちょー英雄

野梨原花南
イラスト／宮城とおこ



ジールVS.トードリアの戦争勃発！　世界を守るため奔走する宝珠やオニキス。だが、魔王はすでに兵器として発動されてしまって!?

〈ちょー〉シリーズ・好評既刊

ちょー美女と野獣
ちょー後宮からの逃走
ちょー歓喜の歌
ちょー戦争と平和

他13冊好評発売中

〈好評発売中〉 コバルト文庫

秘石に導かれた救国の少女。
「守龍」の世界を描く新シリーズ!

緑のアルダ

石占(いしうら)の娘

榎木洋子
イラスト／唯月　一



占い師アルダは緑の獣、少年剣士にめぐり会う。そして千年の昔より呪われた祖国の運命を覆す冒険が始まった！『龍と魔法使い』、『リダーロイス』に続く冒険ファンタジー。

〈好評発売中〉 コバルト文庫

過去と現在を繋ぐ指輪を巡る物語。
レヴィローズの指輪
紅の封印

高遠砂夜
イラスト／起家一子



魔力がないため炎の一族の城から追われた青年ローは一族の天才少年エリオスに近づく…。かつてのレヴィローズを描く貴重な番外編。

〈レヴィローズの指輪〉シリーズ・好評既刊

レヴィローズの指輪
ジェリーブルーの宝玉
闇の中の眠り姫
幽霊屋敷と風の宝玉
シャンレインの石
ルファーヌ家の秘密
グレデュースの鎖

〈好評発売中〉 コバルト文庫

戦いの女神が欲したもの——
それは、初めての恋。

砂漠の花

金蓮花
イラスト／珠黎皐夕



16歳にして大国の女王として君臨したカリュン。政治を執る中、属国の公子と出会う。身分を偽って逢瀬を重ねるうち、心に芽生えたのは、決して許されない想いだった！

コバルト文庫 雑誌Cobalt

「ノベル大賞」「ロマン大賞」

募集中!

集英社コバルト文庫、雑誌Cobalt編集部では、エンターテインメント小説の新しい書き手の方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人賞の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。ともに、コバルトの読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、自分の才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか!

〈大賞入選作〉
正賞の楯と副賞100万円(税込)

〈佳作入選作〉
正賞の楯と副賞50万円(税込)

ノベル大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙95～105枚。
【締切】 毎年7月10日（当日消印有効）
【応募資格】 男女・年齢は問いませんが、新人に限ります。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt12月号誌上（および12月刊の文庫のチラシ誌上）。大賞入選作も同誌上に掲載。
【原稿宛先】 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10（株）集英社
コバルト編集部「ノベル大賞」係
※なお、ノベル大賞の最終候補作は、読者審査員の審査によって選ばれる「ノベル大賞・読者大賞」（大賞入選作は正賞の楯と副賞50万円）の対象になります。

ロマン大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙250～350枚。
【締切】 毎年1月10日（当日消印有効）
【応募資格】 男女・年齢・プロ・アマを問いません。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt8月号誌上（および8月刊の文庫のチラシ誌上）。大賞入選作はコバルト文庫で出版（その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします）。
【原稿宛先】 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10（株）集英社
コバルト編集部「ロマン大賞」係

★応募に関するくわしい要項は隔月刊誌Cobalt（1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売）をごらんください。

9784086002042

ISBN4-08-600204-3

C0193 ¥419E

1920193004199

定価 本体419円＋税



コバルト文庫